

## 「 M E A C U L P A 」

彼等の勝利は、ただ相手の弱さから来る偶然、それだけの話にすぎないのだ。ただ獲物の故に獲物を奪ったにすぎない。暴力による掠奪であり、凶悪きわまる大規模な殺戮だ。そして奴等は、ただまっしぐらに、盲滅法それに飛びこんでいった。それでこそ闇黒と格闘するものにふさわしいのだ。

ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』

俺は夢を見ない。  
俺は希望をもたない。絶望することもない。  
泣くこともなく、心の底から笑うこともなく、  
明日のことなど考えもせず　　そもそも、生きていたいとすら思わない。  
それでも、俺は生きている。  
美しかった過去だけをよすがに、俺は生きている。  
過ぎ去った日々の記憶に浸りながら　　ただ、闇の中で息をしている。

1

闇。無明の闇。  
俺を取り囲む闇　　いつものことだ。  
俺は知っている。これは夢なき俺の夢。眠りにつけば見出すことのできる、俺の住む世界、俺の人生、俺の魂のイメージ。  
目の前にかざした自分の手も見えないような漆黒の闇の中で、俺はまどろんでいる。胸の悪くなるような思いと、ある種の安らぎをいただきながら。  
俺はまどろみながら、闇の中に落ちていく。自分の身体が下方へと沈み込む、リアルな感触。落下に身を任せる　　闇の底まで落ちてしまえと念じながら。  
だが、落下は必ず途中で止まる。それも知っている。  
俺が目覚めるからだ。目覚めたところで、やはりあるのは闇だけだと分かっている。  
俺は目覚める　　起きてさえいれば、あいつのことを夢見ることができるから。

夢のない眠りを覚ましたのは電子音だった。  
薄く、目を開く。電子音は、ナイトテーブルの上に置かれた携帯電話の放つもの。どこかの馬鹿が、俺の安眠をじゃましたわけだ　　不快な、朝という現実。

舌打ちし、寝そべった状態のままそいつを手にする。

「はい？」

ひからびた口腔にへばりついた舌をひきはがしながら応じる。イタリア語とともに吐き出した息には昨日のジンの臭いがただよっていた。

『いい身分だな、志貴。帰国するなり、女と酒だ……こちらへの報告もせずにな』

前置き抜きやしわがれ声 ジョゼッペ。眠気はそれで吹き飛ぶ。

同時に、昨晚はアルコールで忘れていた憤怒が、その声とともによみがえった。考える前に、憤怒がそのまま怒号となってほとばしる。

「報告だと？ ……いいかよく聞けよ、このシチリア野郎。こっちは昨日の夜に、カザフスタンくんだりから帰ってきたんだ。あんたの用意したくそみたいな仕事のためにな。その俺に、帰るなりあんたのご機嫌うかがいをしろってのか？ 馬鹿言うんじゃねえ！」

口から泡を吹きながら怒鳴りちらす。一気にまくしたてたせいで、ひどい吐き気がこみあげ、俺は口元をおさえた。

一呼吸おいて、ぞっとするほど落ち着いたトーンのジョゼッペの声が聞こえ、俺の吐き気は倍増することになった。

『なるほど。長旅の疲れのあまり、こちらに寄ることもできなかったというわけか……それほど疲れたお前が、金髪の娼婦を殴る元気があったというのは実に不思議だが』

言葉を切ったあと、奴はわざとらしく音を立てて、鼻で笑った。

その瞬間、憤怒は頂点に達した。喉元にまで胃液がこみ上げていたにもかかわらず、吐き気がとうとつにおさまる。頭に大量の血液が一気に流入し、殴られた時のような目まいに襲われた。

音が聞こえた プラスチックのきしむ音が。何の音かは分かっている。

俺は、携帯電話を強く握りしめている。今にも破壊しそうなほどの握力で。

ジョゼッペは昨日の俺の行状を知っている。だがそんなことはどうでもいい、奴が何もかもお見通しなのは、今に始まったことじゃない。

肝心なのは 昨日の俺の行動の中に隠されたものを奴は知り抜いており、かつそれを嘲笑っている。その事実だった。

憤怒は消え、代わりにこみあげてきたものは……この上なく純粋な、殺意。

「ジョゼッペ……」

かすれた、うなり声。自分で出しているのが信じられないほど、その声は冷えていた。

『何だ』

「ぶち殺すぞ」

また、ジョゼッペは笑った。今度は声に出して。

『それはかまわんが……その後お前は どうやって生きる気だ？ 私を殺したあと、誰がお前に生きる場所を与える？ 実効のない脅しは滑稽でしかないぞ、志貴』

口調を変え、断じるようにそう言うと、ジョゼッペは俺に反論のいとまを与えず続けた。

『迎えをよこす。可及的すみやかに報告に來い。……女を買いに行ったりせずにな』  
最後に露骨な嘲笑を残し、電話は切れた。  
殺してやる。声にならない声は、齒ぎしりにかき消された。  
手の中で、携帯電話が砕け散った。

目がくらむほどの殺意をおさえこみ、現実に立ち戻るにはたっぴり十分をようした。空回りする殺意に駆られていたところで、そんなものはただの時間の浪費だ。

ようやくたどりついた、当然の認識。俺が得たものは、全身に残る重い倦怠感だけ。それは昨夜の深酒によるものではないだろう。足元に転がる、タンカレーの空瓶を軽く蹴りながら、そんなことを思った。

未だ握りしめたままの、携帯電話の破片を手から払い落とし、立ち上がる。

ここはローマ。サヴォイ・ホテルのスイート。俺の汚れ仕事に対し、ヴァチカンが支払う報酬によって年間契約している、十年來の住処。

赤を基調にしたじゅうたんと絶妙なコントラストを形成する真っ白な壁、凝った装飾がほどこされた家具類。いかにも金がかかった瀟洒な内装の、広々とした部屋。そんなものは何の慰めにもならない。そもそも、俺は衣食住に気を使う人間ではない。

単に寝泊りするだけの場所なら、ユースホステルや簡易宿泊所でもよかったし、それこそ野宿だってかまわない。

にもかかわらず、ここに住んでいるのは……あの日、あの殺戮の夜を過ごしたホテルの一室に、よく似ていたからだ。

すなわち、この部屋はあいつを思い出させる。この部屋にいれば、あいつと過ごした日々の記憶に浸ることができる。この部屋でなら、甘美で暖かい、あいつの夢を見て眠りにつくことができる。

この十年。俺はそれだけにすがって生きてきたのだ。

首を振った。ベッドから身を起こし、立ち上がる。死にたくなるような気だるさとともに、浴室に向かった。

洗面台の前に立ち、自らの姿を鏡に映す。

だらしなくのびた、脂じみた黒髪。肉のそげ落ちた頬と、それをおおう無精ひげ。無骨なデザインのフレームの眼鏡の奥にある瞳は、生氣というものを全く宿さない死人のそれだった。

肉体に目を転じれば、異様なほど筋ばった、ボディビルダーの筋肉を圧縮して骨格の中に無理やり押し込んだような様相の上半身。その表面は胸の古傷を中心に無数の傷痕にふちどられ、奇妙な幾何学模様を形成している。

まぎれもない、俺という人間の姿だった。

俺。遠野志貴。ヴァチカン法王庁の誇る暗殺部隊、埋葬機関の殺し屋。化物狩り専門

の、仮借なき<sup>スカルハンター</sup>首斬人。執行者の<sup>エンフォーサー</sup>異名をとる、人間の形をした<sup>ババ</sup>法王の最後通牒。

そして、その両眼によって、この世のあらゆる存在が内包する絶対の“死”を見出し、それをとらえることのできる常識はずれの怪物　それが俺、遠野志貴だった。

肩をすくめた。だから何だってんだ。自嘲気味に吐き棄て、眼鏡をはずして洗顔を始めた。

冷たい水で乱暴に顔をこすり、タオルで水滴をぬぐうや素早く眼鏡をかけなおす。その間、ずっと目は閉じたまま　裸眼で世界を見れば、そこに充満した“死”を視てしまうがために身についた、二十年来の習性。

朝の洗顔のたびに自分の脳細胞が焼き切れる危険を犯さねばならないのは、この世で俺ぐらいのものだろう。そう思うと、無性におかしかった。

薄ら笑いをしつつ、今度は顔にシェービングクリームを塗りたくる。数日ぶりに顔をあたり、無精ひげをすっかり剃り落とそうと安全剃刀を手を取った、その時

声が聞こえた。決してここにいるはずのない女の、ここで聞くはずのない声。

『なによ、ほんとの化物は貴方のほうじゃない』

剃刀を取り落とした。プラスチックが洗面台の中を転げる乾いた音が響きわたる。停止した思考の中で、空白になった脳裏をその音だけが何度もこだましていた。

そして襲ってきた、凄まじい頭痛　焼けた鉄でできた手が、大脳をわしづかみにしたかのような熱と激痛。

息がつまり、全身から脂汗が噴き出し、視界は赤く明滅している。すぐに立っていることができなくなり、洗面台の上に崩れ落ちた。

目を開けていられないほどの頭痛の中で、真っ先に浮かんだのは、昨夜の紅い瞳。

帰途についていた俺に声をかけてきた娼婦。白に近いプラチナブロンドに、何を思ったのか赤いカラーコンタクトをつけていた。偽りの紅い瞳。そいつが、忘れようとしていた全てを思い出させた。

気づいたらぶちのめしていた。血に染まった女の顔。血に染まった紅い瞳　頭痛が最高潮に達した。断片的なイメージが白濁する意識の中を飛びかう。

紅い瞳。忘れられぬ紅い瞳。それを思い出させた馬鹿な娼婦　殺してやればよかった。俺は金髪の女とは寝ない。寝るならブルネットか赤毛。金髪はだめだ。あいつを思い出す。あいつ。白い女。追いつけた十年。今も追いつけている。決して届くことのない、白い幻影。未練たらたらで自暴自棄の人生。血と殺戮で渴きをごまかす。ジョゼッペはその惨めさを囁く。

死にたい　あいつには逢えないから。

死にたくない　あいつの夢を見られなくなるから。

一目でいい、もう一度姿を見せてくれ。俺に笑いかけてくれ。あの時のように、俺を許すと言ってくれ。俺を救ってくれ

アルケイド。もうろうとする意識の中、やけに明瞭な声でその名を呼んだ。

頭痛がおさまってきた。洗面台の上に突っ伏したまま、何度も荒い息をつく。

頭痛はおさまり……残ったのは、終わってしまった夢、消えてしまった美しい幻を想い、闇の中で殺戮を重ねるのみの現実　そしてゴミのような自己憐憫。

意識が回復し、鏡に映った己の肖像がだんだんと鮮明に見えてきた。髪を乱して汗だくになり、陶器の洗面台に這いつくばった男の相貌は、この上なく惨めだった。

俺は泣きたかった。大声で嗚咽したかった。

だが、涙は流れることはなく、代わりに出てきたものは大量の反吐だけだった。

背中を波打たせて何度も嘔吐する。胃液を出し尽くし、蛇口に口をつけて水をがぶ飲みすると、気分は少しましになった。少なくとも、ひげを剃ることはできそうだ。

洗面台から身を起こし、反吐まじりのシェービングクリームを剃刀でこそげおとしていく。眼鏡をかけた、土気色をした殺し屋の顔から、無精ひげがきれいに失せていった。

いつもながら最低の朝だった。毎朝この調子なのだ。

毎朝、俺の前から去っていったアルクェイド　白い吸血鬼のことを思い出し、アルクェイドのいない現実を思い知らされ、そして最後はお定まりの頭痛。

頭痛の原因は分かっていた。この十年、俺の両眼は見るべきではない“死”を見すぎており、それがもたらす負荷に脳細胞が耐え切れなくなっているのだ。そのつけが、先程のような頭痛となって表出する。

症状はひどくなる一方だった。頭痛だけではなく　脳梗塞や肝性脳症のように　破壊された脳細胞は俺の理性をも削り取り、感情の抑制が困難になり、凶暴性が増した。それは人格の変調というより……俺の生来の<sup>クラインスティンクト</sup>殺戮本能が剥き出しになったという方が的確だろう。

そして、日々肥大していく殺意を満たすために、俺は化物どもを狩り殺し続ける。

ロアと呼ばれた吸血鬼を殺し　アルクェイドを<sup>うしな</sup>喪ったあの日から、俺はそうやって生きてきたのだ。

そんなことを考えながら、反吐のこびりついた眼鏡をはずしてタオルでぬぐう。それを手にしたまま、今度は眼は閉じずに裸眼で鏡を見た。

ほうほうに“死”の線が走り、ひびわれたように見える鏡。その中にいるのは、流血と追憶にしか慰めを見出せない、哀れな殺しの<sup>マシン</sup>機械が映っていた。

嗤った。自らのその姿、自らの惨めったらしさを、嗤った。

醜いな。声に出してつぶやく。口にしたとたん、これ以上自らの像を見ていることが耐えがたくなる。手にしたままの安全剃刀を鏡にあて、“死”の線をそっとなぞった。

刹那、音高く鏡は砕け散った。俺がもたらした、物質の完全なる“死”。

これ以上はないというほど細かく刻まれた破片が、銀の雪のように洗面台に降りそそいだ時、ドアの方からノックの音が響いた。

頭痛をおぼえながら眼鏡をかけなおし、洗面台の前を離れてそちらに向かった。

ドアを開けると、入ってきたのはカソック姿の若い男だった。ほっそりした体躯。短く刈り込んだ栗色の髪に、整った顔立ち　なかなかの色男だが、肉体の動きから見て完全な

素人だろう。司教の稚児ぐらいの役にしか立ちそうもない。

「シニョーレ・トオノ。お迎えにあがりました」

慇懃な口調で、稚児野郎はそう言った。

そこでようやく、俺は先程のジョゼッペの言葉を思い出した。こいつが、俺が逃げないよう奴がよこした迎えだろう。そう思うと、先だつての憤怒がまたぶり返した。

男を押しつけて、窓に向かう。窓越しに下のヴェネト通りを見下ろすと、ヴァチカン・プレートをつけた黒塗りのメルツェデス・ベンツS600Lが、並木の横に駐められていた。俺のような暗殺屋の迎えには、馬鹿馬鹿しいほどそぐわない車。おそらく、ジョゼッペ一流の皮肉だろう。自分の意に従わない俺に対するあてつけ。法王専用車まがいのオープンカーでなかっただけでもましというべきか。

俺は鼻を鳴らすと、迎えの男に向きなおった。

「俺は自分の車で行く。お前はとっととヴァチカンに帰れ」

言い捨て、ドアの所で棒立ちになっている男の横を通過して、部屋から出ようとする。その俺を男はあわてて制止した。

「ま、待ってください、シニョーレ。私は<sup>げいご</sup>狛下の命を受けてあなたを……」

そこまでしか言わせなかった。気づけば、俺は男の喉首をひっつかんで壁に叩きつけていた。狛下。ジョゼッペを指したその言葉が、俺の(きわめてはずれやすい)理性のたがを吹っ飛ばしたのだ。

「ジョゼッペが言ったから何だつてんだ？俺は俺の車で行く。お前みたいな小僧にごちゃごちゃ言わせやしねえ」

喉をわしづかみにされ、壁に押しつけられた男の、恐怖に濁った目。それを見た時、激情は冷めた。

こんな小僧を脅しつけたところで、何の意味もない。相手は俺が何者かも知らない、ただの使い走りなのだ。文句はジョゼッペに言うのが筋というものだろう。

うんざりだった。空回りする無意味な激情と、その後すぐにやってくる後悔の繰り返し。自己に対する軽蔑と憎悪だけが、胸の中に沈殿していく。

手を離した。男はずり落ちて床にへたり込み、目に涙をにじませながら激しくせきこんだ。俺はホテルの廊下に踏み出し、肩越しにそいつに告げた。

「……………浴室の鏡が壊れた。請求書は管財局に送るようにフロントに言っとけ」

我ながら、力のない声。こんなくだらない些事すら、自分が傲慢なだけの飼われ犬にすぎない事実をつきつけてくる。

死ぬべきだった。ふと、そう思う。

ネロとの戦いの時でも、ロアと相対した時でもいい。十年前、あの月の下で、あいつの声を聞きながら。俺は死ぬべきだったのだ。

見たことのない、車だった。

路肩に乗り上げ、街灯に鼻をこすりつけるようにして駐めてある、銀色のシトロエン X M。その前にはいつも通りに古色蒼然とした V W ゴルフ　　この十年変わらぬ、ジョゼッペの愛車。

鈴なりになって路上駐車してある車　　ローマでは珍しくない光景。

だが、ここ……ヴァチカンにほど近い、サン・ピエトロ駅の西側に位置するこの通りでは、そんな光景はついぞ見たことがない。

正確にいうなら、俺の目の前にある、気の遠くなるほどの昔から建っているレンガ造りの建物の前の通りには、まともな知能を持っているローマの人間なら誰も駐車したりしない。それどころか、近寄ることすらしない。

にもかかわらず、ここに駐めているということは、このシトロエンの持ち主はよっぽどの馬鹿か……そうでなければ、関係者ということになる。

そこで鳴り響く、空砲の音　　ヴァチカンからの正午の報せ。敬虔なローマ市民の皆様が十字を切り、黙祷をするその瞬間に、俺はダッシュボードの金時計に目をやっただけだった。

スノビズム丸出しの悪趣味な金時計は十二時十八分を告げていた。舌打ちする。イタリア車はこれだからだめなんだ　　イタ公どもはメーター類に精確さが必要だなんて、考えたこともないんだろう。

つのるいらだちを抑えながら、ギアをローに入れた。荒々しくエンジンを吹かしながら例のシトロエンの後ろにぴったりつける　　これで、ジョゼッペと俺の車に挟まれるかっこうになったシトロエンは、俺達が帰るまでこの場を去ることができなくなったわけだ。

つまらない腹いせをして満足すると、俺は愛車　　マセラッティ・カリフのエンジンを切った。車から降り立ち、目の前の建物を見上げる。

何の変哲もない、レンガ造りの三階建て。ただ、窓は全て鎧戸をおろし、正面入口は板材をいいかげんに打ちつけることによって封印されている。誰が見ても、今は使用されることのない廃屋　　しかし、実際にはそうではない。

こここそが謎多きヴァチカンの闇の最暗部、今は亡き<sup>インクイジション</sup>異端審問所の意志の忠実なる具現者　　我らが埋葬機関の庁舎なのだ。

苦笑した。真面目に隠蔽する気概の感じられない、薄っぺらな<sup>カブリ</sup>隠れ蓑。一般の人間はさすがにその内実までは知らないが、化物屋敷扱いされている時点ですでに機密性もへったくれもあったもんじゃない。

まあ、全てが露見したところで、それを真に受ける人間が少ないというのがあってのことなのだが。ヴァチカンには秘密組織があって、そこは化物退治が仕事です　　こんな与太話、誰が信じる？

だが、その与太話の世界で俺が生きているのもまた事実だった。酔っ払いのたわ言なみに

現実性の乏しい世界の中で、さらに実体のない幻を追うだけの人生 喜劇としかいいようがない。

唾を吐き棄てる。胃液の苦い味はまだ残っていた。

ひどく、気が重かった。ここには入りたくないし、何よりジョゼッペには顔をあわせたくない。

だが、逃げ出すわけにもいかない。あらゆる意味でここが俺の<sup>基-点</sup>であり、そしてジョゼッペこそが 朝方、本人が口にしたように 唯一、俺に生きる場所を与えられる存在なのだ。逃げたところで、あるのは無だけ。

行くか。つぶやいて、足を踏み出す。封印された正面入口は当然使えない。いつものごとく、建物の裏にまわる。

真昼だというのにまったく陽がささない裏路地。正面からちょうど反対側にあたるその場所に、闇への入口であるオーク材の扉があった。

決められた合言葉か、魔法でも使わなければそこに入れない その方がそれらしいのだが、実際には合鍵ひとつで中に入ることができる。雰囲気も何もあったもんじゃない。いかにも実利主義の塊であるジョゼッペらしい趣向。

扉を開け、足を踏み入れた 闇の奥へ。

古びた外見とは裏腹に、内装は簡素ながらよく手入れされていた。抜け毛ひとつ落ちていない薄っぺらいじゅうたん敷きの長い廊下を、板張りの壁に等間隔ですえつけられた無数の電灯がぼんやり照らし出している。建物の中に人の気配はなく、聞こえてくるのは空調の稼働する音だけだった。

後ろ手で、やたらと重いオーク材の扉を閉める。誰かが毎日油をさしてでもいるのか、ちょうつがいは全くきしみを立てなかった。

「志貴か。こっちだ」

扉を完全に閉め、ドアノブから手を離れた瞬間に、奥の方から響いてきた、声。

しわがれていながら、恐ろしくよくとおるシチリアなまりの、声。

言うまでもなく、ジョゼッペ。胃がむかついた。胃液が逆流し、悪臭を伴うガスがのどから押し出される。ぶりかえす嘔吐感と 殺意。

息を吸い、止める。返事をする事なく、足を踏み鳴らして廊下を進み、その声の元に向かう。

廊下の突き当たりにある、半開きになった扉。隙間から室内の明かりが廊下に漏れ出している。ここでは執務室と呼ばれる部屋 毒蛇ジョゼッペの巣穴。

横殴りに拳を叩きつけ、扉を全開にする。蛍光灯のまぶしい光が、廊下の暗さに慣れていた眼を突き刺した。

こぢんまりとした部屋だった。壁一面にしつらえられた本棚は得体の知れないラテン語の

蔵書に満ち、その中心にはオフィスの平社員にふさわしいデスクが置かれている。リノリウム張りの床の上にはそのデスク以外には何一つ置かれていない。執務室というより、はやってない会計事務所か何かに見える。

だが、すりきれた黒いカソックをまとった部屋の主が、その雰囲気全てをぶち壊しにしていた。

デスクの上に並べられたラップトップ・コンピュータ、テレックス、そして無数の書類の山にうずもれるようにして座っている小男　　ジョゼッペ。

「扉ぐらい静かに開けられんのか？」

コンピュータのディスプレイから眼をそらすことなく、ジョゼッペは不平を口にした。左手に持った書類に時折眼をやりながら、右手は忙しくキーを叩いている。俺の方は見ようともせず、目の前の仕事に没頭していた。

俺はあいさつもなしにジョゼッペのもとに歩み寄ると、デスクのへり目がけて力任せに拳を叩きつけた。デスク上のコンピュータとテレックスが飛びはね、数枚の書類が宙を舞う。

「報告に来たぜ、ジョゼッペ」

ジョゼッペは身じろぎもしなかった。右手で依然キーを叩きながら、左手を熟練の指揮者さながらに躍らせて宙に舞っていた書類を回収する。その間、目はディスプレイを注視したまま　　かつて最強と謳われた魔狩人としての能力の片鱗。

左手につかんだ書類をデスクの山に戻したところで、ようやく事務仕事を中断し、その身体をこちらに向けた。

「騒がしい男だ」

あきれたようなため息。答える代わりに、俺は奴の顔をにらみ返した。

ぴったりと後ろになでつけられた白髪。深く刻まれた無数のしわに埋もれている、灰緑色の小さな目。とがった鷲鼻と、薄い唇　　酷薄というものを絵に書いたような面構え。

この男こそがジョゼッペ　　正しくはアントーニオ・カリアーニ司祭。

ヴァチカン法王庁の崇高にして偏狭なる意志を体現する影の暴力装置、埋葬機関の長。市井に知られざる闇の中での絶大な功績により、枢機卿どころか司教ですらないにも関わらず“猊下”と尊称されるシチリア人。現役時代、ヨーロッパで無数の吸血鬼を殺しまくった最強の戦闘機械　　そして、俺をこの闇の世界に引っぱり込んだ張本人。

「聞こうか。お前の報告を」

興味のなさそうな声でそう言うと、ふところから細巻を取り出し、ビュッの使い捨てライターで火をつけた。閉めきった執務室の中に、安葉巻の甘ったるい香りがたちこめる。

「まず聞きたいのは……何故、計画を　　私の命令を無視したかということだ」

ジョゼッペの言葉　　予想通りの詰問。俺はまなじりを吊り上げ、大口を開けて笑った。俺の持つ中で、いちばんすてきな笑顔。この顔で俺が笑えば、女も子供も、不死の化物達もおののき腰を抜かす。

「……計画？　どこからどこまでのことかな、カリアーニ司祭殿。いろいろありすぎて、

どこから話したらいいものか見当もつかん」

笑顔の俺に、ジョゼッペは何の反応も示さなかった。これがいつもの俺との、お定まりのやり取りだったからだ。

「全てだ。お前は用意された装備には手もふれず、同行するはずだった作戦の遂行者達を現地に立ち入らせることすらせず、現地の協力者は完全に無視した。その理由を説明しろ」

俺は声をあげて笑った　今朝方の意趣返しのつもりで。

「装備　　くそ重いだけで過剰殺戮にしか使えん、あの聖典とやらのことか？　作戦の遂行者　　手品程度の魔術が使えるというだけで、吸血鬼が殺せると思い込んでるイエズス会の猿野郎どものことか？　現地の協力者　　連絡役のくせに現地語も話せない東方教会の白痴のことか？……そんなものをあんたはどうしろと言うつもりなんだ、ジョゼッペ？」

まくしたてる俺に、ジョゼッペは言葉を返さなかった。現場というものを誰よりも心得ている奴は、俺の言葉の方に理があることを知っているのだ。

しばらくの間、ジョゼッペは無言で臭い紫煙を喫い続けた。俺も奴の言葉を待つべく、自分の煙草を取り出してくわえる。

「……それで“巨人”はどうした？」

灰を落とし、細巻をクリスタルの灰皿の上に置いたところで、奴はその名　　今回の仕事の標的であった吸血鬼の通り名を口にした。

「片づけたさ、当然。きれいさっぱり、跡形もなく、な」

俺は肩をすくめ、煙草に火をつけた。深く紫煙を喫い込み、肺胞を満たす。

“巨人”。カザフスタンのちっぽけな村をまるごと死者の領域となし、支配していた吸血鬼。吸血鬼というより、フランケンシュタインの怪物といった方がふさわしい巨体を持った、見かけ倒しのクズ野郎。

俺は奴の長い腕をかいくぐり、たったの一撃で奴の存在をこの世から消し去った　　その間、奴にできたことといえば、自分のねぐらの床を、でかい拳で砕くぐらいのものだった。

「あの程度の化物なら、支援だのなんだのは必要ない。俺が独り出向いて行って、真正面からこいつでぶち殺せば終わる話だろが」

くわえ煙草でしゃべりながら、俺は着ていた黒革のコートのすそを持ち上げ、脇に吊るしたナイフを示した。七つ夜と銘打たれた、十年以上の間殺しに愛用してきたナイフ。手に入れたときは折りたたみ式だったが、今は実用性を考えて頑丈な柄を取りつけてある。

「まさかあいつが雑魚だとは思わなかった、なんて言うなよ、ジョゼッペ。あんたは最初から知ってたはずだ。“巨人”は三流もいいところの吸血鬼で、このまともな機関員だったら、誰だって独りで始末できたことをな。……“巨人”そのものより、現地に着くまでの方がよっぽど苦労したぜ」

でたらめな空港の税関。現地の足に調達したぼろいシュコダ。それらを思い出し、俺は大きく舌打ちした。

「……確かに、お世辞にも強敵とは言えない吸血鬼だった　　だが、だからこそ多くの人間を関わらせざるを得なかった。……そんなことも分かんのか？」

ジョゼッペの、苦々しい声。決して本意で言っているわけではないことが、はっきりと伝わってくる。

「……分かっているさ。どうあろうと、俺はやすやす“巨人”を始末できただろう。そんなたやすい仕事だから、ついでにイエズス会と東方教会の連中　　化物退治のイロハも分かってない素人どもにも、いい格好をさせたかったんだろ？」

「言葉が過ぎるぞ、志貴。……それを理解しているなら、こちらの意図に従うことだ。人が集まり、組織を成せば、そういう不条理も出てくる。世の常だ。いいかげん、そのぐらいのことは……」

「そんなどこかの役人みたいな説教は聞きたかないね。たとえあんな雑魚が相手でも、現場に行って身体を張るのは俺なんだ。銃後のあんたは、俺の支援に全力を注ぐのが筋ってものだろうが。そこに馬鹿げた組織の論理とやらを持ち込むのか、あんたは？」

「……だがその論理があるからこそ、組織は成り立つ。そしてお前はその組織なしには生きられない、違うか？」

互いに言葉を切り、にらみあった。

だがそれも一瞬だった。ジョゼッペは下を向いてため息をつき、俺は短くなって指を焦がし始めた煙草をもみ消した。

奴は分かっている。俺の言うことの方が正しいことを。

俺も分かっている。奴がそう思いながらも、どうにもできないことを。

いかに卓抜した能力を持ち、敬意を払われていたとしても、ジョゼッペは一介の特殊技術者にすぎない。きわめて官僚主義的なヴァチカンの位<sup>ヒエラルキ</sup>階の中では、最低位の平司祭なのだ。いかに反駁したところで、大司教あたりが出てくれば従わざるをえない。

結局、俺達がここでいがみあったところで、何も変わりはないのだ。

俺が何を言おうと、ジョゼッペはまたお荷物つきの仕事を用意し、俺はそいつを片づけて文句を言う　　十年の間変わらぬ、無為な繰り返し。人はそれをルーティンと呼ぶ。　　変わらぬ、無為な明日しかないのなら、せめて今はこの不快なおしゃべりを短くするべきだろう。俺がそう思い、禅問答を切り上げようとしたところで、奴がそいつを再燃させるようなことを口にした。

「お前は命令を全て無視し、作戦をぶち壊しにした。“巨人”は斃したが、その他の目的は全てかなわなかった　　お前は自分の仕事が単なる化物退治ではなく、東西融和の一端をになうものだと、いつになったら理解するのだ」

「知ったことか。スラブ人のご機嫌取りぐらい自分でしろと枢機卿どもに言ってやれ。……そもそも、奴らが自分でまいた種じゃねえか」

この十年、俺の仕事はほとんどが東欧だった。これは偶然ではなく、ジョゼッペが今言ったように、それが法王庁の東方政策の一環という意味合いも持つためである。

東西冷戦構造の中で冷え切った東方教会との関係を修復するため、現在ヴァチカンはずざまな努力を試みている。

俺の仕事もそのひとつだ。かつてヴァチカンが、その政治的立場のために意図的に放置し（そして東方教会の能力では対処できなかった）、東欧及び中央アジア各地で野放しの状態にあった化物ども。冷戦が終わり、法王庁の政策が東西融和に向かっている今、その化物どもの始末を、歩み寄りの一条件として東方教会が要求してきている　　そこで我らが埋葬機関、我らが掃除屋遠野志貴の出番と相成ったわけだ。

そういった次第で、今回だけでなく、俺の仕事はいつもこんな調子だった。東欧各地に巣食った化物どもを叩き殺すだけでなく、必ず東方教会の連中の顔も立てるようにジョゼッペはお膳立てする　　無論、俺の意志など無関係に。

十年もの間そんなことを続けていたために、東欧の吸血鬼が絶滅危惧種に認定されそうなほどその数を減じた今、その手の配慮が任務の中に占める割合は年々大きくなっている。今では自分が殺し屋なのか接待役なのか分からなくなるほどだ。

「……そして、何よりも腹立たしいのは、それでもお前に報酬を払わねばならんということだ。お前は確かに“巨人”を殺し、与えられた任務をこなした　　それに付随することは全て台無しになったがな」

そこで言葉を切り、奴は人さし指を突き出した。

「それでも法王庁はお前にきちんと金を払えと言う。まさかお前の言う“スラブ人のご機嫌取り”をしなかったから報酬は無し、というわけにもいかんし、何よりお前を怒らせたくないのだ。……腰抜けの老いぼれどもが」

俺は肩をすくめた。奴は俺に支払われる金を惜しんでこんなことを言っているのではない。徹底した秩序主義者のジョゼッペは、命令を無視したにも関わらず、俺に甘い顔をする法王庁の無節操ぶりが気に食わないのだ。

だが、俺は法王庁の方が正しいと思う。こんな腐れ仕事、無報酬でやれと言われたら、気が短い俺は本当に暴れ出すだろう。そして、今の俺を止めるにはそれこそ雷撃旅団の精鋭一個中隊は必要だ。ヴァチカンを警備する間抜けなスイス人衛兵では話にならない。

そんなことになるくらいだったら金で解決しようという判断は、理性的であっても臆病とはいえない。

「昨日の晩のこともだ。お前が顔を叩き潰した女を病院に運び込むために、又オーヴァ教会の修道士達に移送を頼まねばならなかった……修道士に娼婦の肉体をふれさせるとは何ごとかと、上からどやされたぞ　　夜中の二時にな」

昨日の晩の娼婦　　紅い瞳。二本目の煙草を取り出していた指が、大きくけいれんした。

「あれから十年以上経つ。なのに、お前は未だに幻想に溺れているのか。未だに現実から背を向けて過去しか見ようとししないのか」

「黙れ」

手の中の煙草が折れた。朝方よりさらに明確な殺意が全身を満たす。だが、俺のひ弱な理

性はけなげにもそれを押しとどめていた。

「いや、言ってやる。何度でも言ってやる。お前の白い姫は死んだ　お前がその手で刻み殺したのだ。あの女の存在は完全に消滅した……いいかげん目を覚ませ。アルクエイド・ブリュンスタッドと呼ばれた吸血鬼はもう存在しない。絶対に。無いものは無いんだ」

奴は、はっきりとあいつの名を口にした。そして、その存在を完全に否定した  
ジョゼッペは今あいつを穢したのだ。

そこで、理性の弱々しい抵抗が終わった。殺意が俺の意志　人間性の残りかすを完全に塗りつぶし、肉体を支配する。脳の回転が危険なほどに速まり、眼鏡越しにもジョゼッペの全身に走る“死”が見えた。

肉をまとった殺意そのものとなった俺　動いた。

折れた煙草を棄てる／手を七つ夜の柄に／斬りかかる　コンマの世界の反射運動。

だがジョゼッペもそれは予測していた。後方に大きく飛びのき、紙一重で白刃をかわす。俺はそのままデスクを飛び越えて躍りかかろうとする。

「そこまでだ」

壁際まで後退したジョゼッペに向け、デスクを飛び越えたところで足を止めた。別に、奴の制止の声で我に返ったわけではない　奴の手にいつのまにか拳銃が握られていたためだ。

「いかに強大な攻撃能力を誇ろうとも、お前の肉体の耐久力は人間の域を出てはいない。こいつを一発心臓に撃ち込めばしまいだ　そして私はこの距離なら絶対にはずさん」

相変わらず冷静なジョゼッペの声。だが俺の殺意は衰えることを知らない。いかにしてこの状況を逆転させるか　考えていたのはそれだけだった。

奴が手にしている拳銃……S & Wボディガードはダブルアクションのリボルバーだ。しかも、今は撃鉄が起きていない。すなわち、奴が引鉄をしぼってから銃弾が射出されるまでにはわずかなタイムラグ　輪<sup>リム</sup>胴<sup>マガジン</sup>がまわり、撃鉄を挙げ落とすというプロセスが存在する。

ほんの一瞬だが、人間の限界を越えた反応速度を誇る俺にとっては充分だった。奴が発砲するより早く、左手で足首に仕込んだもう一本のナイフを抜き、投げることができる。それで奴の隙を誘い、白兵戦に持ち込めば確実に俺が勝つ。

無論そのぐらいのことはジョゼッペも完全に読みきっているだろう。奴の方は、いかに俺の機先を制し、距離を詰められる前に確実な一弾を撃ち込めるかに賭けてくる　あとはタイミングが全てを決する。

対峙。互いに微動だにせずならみあい、相手の出方をうかがう。室内の空気が一気に張りつめ、温度が下がったかのようにさえ感じた。

今、この空間の中にはいかなる現実のしがらみも介在しない。もろもろの理由により、こんなところで殺し合いをするべきではない、という理性すらも。

あるのはただ、目の前にいる存在をいかにして完全停止せしめるかという、二つの絶対的

な殺意だけ 俺達のような種のみが構築しうる、この上なく純粋な透明世界。

この、殺意のみで構成された世界にいる時、かつてないほど俺はジョゼッペを知り、ジョゼッペは俺を知る 闇の中で戦い続け、殺意を第二の天性となして生きてきた俺達二人にとって、どんな会話よりも雄弁に互いを語る瞬間だった。

だが、対峙は長く続かなかった。俺は持久戦には向かない こうしてジョゼッペの“死”を見ているこの瞬間にも、俺の脳細胞は音を立てて欠け落ちている。頭痛が殺意を鈍らせるまでにふくれあがり、意識を保つことすらせいっぱい、という状態になるまで、さほどの時間を要さないだろう。

だから動かねばならなかった。不用意に動けば確実に不利であることが分かっている。そしてジョゼッペもそれを知り、俺が焦れて動き出すのを待っていたとしても。

右足に体重をかけ、やや前傾姿勢になって半歩踏み出す。そして身をたわめ、ナイフを投擲すると同時に跳躍するという一連の動きの予備動作を

とうとつに、ジョゼッペが動いた。みじんも警戒心を感じさせない、ひどく無防備な動き。あまりに無防備すぎて、俺が反応できなかつたぐらいだ。

奴は俺に向けた38口径の銃口をおろし、そのままつかつかとデスクまで戻ると、S&Wを卓上に置き、元通り椅子に腰かけた。その姿に先程までの戦闘機械の面影はない。そこにいるのはただ疲れ、倦んだ一人の老人だった。

俺の肉体を支配していた殺意がみるみる雲散霧消していった。それとともに、室内に充満していた緊張が失せていき、現実の世界が戻ってくる。頭痛だけが、先程まで殺意に満たされた空間にいた名残として残っていた。

「一度目を閉じて冷静になれ、志貴。こんなところで脳を酷使しても何の意味も無い」

嘆息まじりの声。俺は素直に従い、目を閉じて深呼吸した。数秒そうしたあと、また目を開く 頭痛は相変わらずだったが、“死”は見えなくなっていた。

「……私とて、お前に向けてあの女のことを口にすることの愚は心得ている。口にすれば、こういうことになるのも知っている だが、そろそろお前は限界に近づいている。言わざるを得なかった」

いつもは俺の目に、射るような視線を向けるジョゼッペ。その奴が、今は目をそらし、苦い横顔を見せながらしゃべっている それを意識したとたん、火花のような頭痛が脳内ではじけ、思わずてのひらで顔をおおった。

また目を閉じ、深呼吸して、奴の言葉を反芻する。そして頭痛がやわらぐのを待って、顔をおおったまま口を開いた。

「……で、キャリアーニ司祭殿。どんな貴重な助言を賜るつもりだ？」

皮肉っぽく訊いた俺を、ジョゼッペは依然見ようとしなない。ただ、肩をすくめた。

「いいかげん、あの女のことは忘れろ。……確かに、お前が殺した、という話は信憑性が高いとはいえない。だが、どちらにしる同じことだ。去っていった女の影を追ったところで、何の意味もあるまい」

怒る以前に、吹き出してしまいそうだった。去った女への未練を断ち切れ 執務室より、安酒場のカウンターでの方が似合いそうな言葉。ジョゼッペがこんなことを言うとは、まさしく世も末だ。

俺は笑顔をやさない。奴はそれが意外だったらしく、ようやくこちらを見やった。

「なんともありがたい助言で涙が出そうだよ、ジョゼッペ。……でも、それについて訊きたいことが一つあるんだがね」

「何だ」

「そのこと以前に……そもそも、俺の人生自体に、何の意味があるんだ？ ただひたすら、自分と似たり寄ったりの化物どもを殺し続けるような人生に」

また、長い嘆息。うんざりした表情を、奴は隠そうともしない。

「意味か……無いな、確かに」

嘆息のあとに続いた言葉は、すばらしく親身だった。

「だったらいいじゃねえか。俺はこの先死ぬまで化物どもをぶち殺すし、あんたは俺がすりきれるまで、せいぜいこき使えばいいさ。……その間に俺が何を考えてようが、あんたの知ったことじゃねえだろ」

吐き棄てる俺に、ジョゼッペは言葉を返さなかった。また俺から目をそらし、天井を見上げている。そして灰皿の上で放置してあった細巻を手に取り、再び火をつけた。

紫煙を何度か喫ったあと、奴はどこかうつろな声で、こんな話を始めた。

「ずいぶん昔の話になるが……ニューイングランドで、妙な修道士に会ったことがある。確かシトー修道会の出身だったと思うが」

俺は口を挟まず、黙って訊くことにした。いかがわしい職務に従事しているとはいえ、さすがに司祭というだけあって、こういう時の奴は茶化せる雰囲気ではない。

「その修道士に会ったのは、何も無い所……本当に何も無い、荒野とっていい場所だった。そこで、そいつは大地にひざまずいていた。身動き一つせずにな。不審に思って、一体何をしているのかと私は訊いた……その問いに、そいつは何と答えたと思う？」

そこで、ジョゼッペはこちらを向いた。今度は横目ではなく、真正面から俺を見すえる。口調にふさわしからざるその眼光の鋭さに、俺は理由もなくどきりとした。

「ただ、祈っているんだと。この世のあらゆる悪徳、あらゆる不条理が哀しくて、それが改められるよう祈っているんだと。地には平和を、人の心には安らぎを。荒野の真ん中で、そうやってその修道士は祈り続けていたんだ」

手にしていた細巻を置き、ゆっくり立ち上がる。俺の目から一瞬たりとも視線をはずすことのないまま、デスクを迂回して俺のかたわらに歩み寄った。

「私は言った。それは無意味だと。こんなことをしていたら、祈りが届く以前にあなたが死んでしまうと。だが、その修道士は笑っただけだった。無意味なのは知っている。それでも祈らずにはられないのだと言って。……数日のあと、私がそこを訪れた時には、彼はもう死んでいた」

首を振った。

「お前を見ていると、そのことが思い出されてならない。荒野で、無意味な祈りを、そうと知りながら続けた修道士のことをな」

「俺は祈っているわけじゃない。そこまで崇高な理想があるわけでもないしな」

そう、俺は何かを求めているわけじゃない　　ただ、全てにうんざりしているだけだ。首を振り返す俺に、奴は肩をすくめて応じた。

「同じだ。闇の底でただ、ありもしないもの、手の届くはずのないものを求め続けている。………実際には触れることすらできないのも承知で。その行為の無意味さを誰よりも知りながら、それを続けることしかできない………どこが違うというんだ？」

抑揚のない問いかけが繰り返される。言葉の一つ一つが、呪いのごとき響きを持った問いかけ。

俺は怒鳴りつけようとした。黙れと。再びナイフを手に取り、斬りかかることさえ考えた  
だが、俺はとどまった。奴の顔に浮かぶ、奇妙な表情が俺をとどめたのだ。

見たことのない表情だった。唇を、顔中のしわを妙な具合にひん曲げ、目には柔和とさえいえるものがにじんでいる。

それは笑みだった。

ジョゼッペは笑っていたのだ。声だけのわざとらしい嘲笑、冷笑しか知らないかに思えた奴が、初めて見せる穏やかな笑み。暗黒の中で数十年を過ごすうちに、笑い方を忘れてしまったのか、その顔は泣いているようにしか見えなかった。

「もう祈るな、志貴………祈りは何ももたらさん。神は誰も救わないんだからな」

祈っているわけじゃない。再度そう応じようとしたが、言葉にはならなかった。

荒野で祈り続けて死んだ修道士。自分の愚行を百も承知で、それを続けた馬鹿な道化。笑い飛ばしたかったが、できなかった。言葉にはならないが、俺はそいつが何を思ってそうしたのか、よく分かる気がしたのだ　　分かりたくなかったが。

届くことのない祈り。無為な追想に浸る日々。どちらも同じことだった。

そこで考えるのをやめた。何かを深く考えるには、俺の脳はすり切れすぎている　　そもそも、今さら内省したところで、全てはもう手遅れなのだ。

「やめてくれ、ジョゼッペ。今になってそう言われたところで、どうしろというんだ？　これから心を入れかえて修道僧にでもなってみるか？　僧院で狂い死にするのが関の山だろうがな」

かたわらのジョゼッペに背を向け、ドアに向けて歩を進めた。いつものように、だがいつもとは違う理由で、これ以上ここにいることが耐えがなくなっていた。

「何が無意味かって、あんたの言葉こそまさしく無意味だよ………俺はもう終わりつつあるんだからな」

吐き棄てた。出す声に力が全く入らず、語尾の方は尻すぼみになる。

「ならせめて、周りの人間にあたるな。自らを呪い、傷つけるような真似はするな。……」

私が言いたいのはそれだけだ」

開いたままのドアに手をかけたところで、奴の声が背中に投げかけられる。足を止め、顔だけそちらに向けた。

「ジョゼッペ。最後に訊きたいんだが」

横目で、デスクの脇で直立したままの奴を見る。

背が低くやせぎすの、無害な老人に見えるが、黒いカソックの下にあるのが鋼のごとき肉体であることを、俺は知っている。だが今の俺の目には、その姿がひどく小さく、弱々しいものとうつつた。

「……あのじいさん、あんたの差し金だろう？」

あのじいさん カザフスタンでの任務の時、何故か俺に協力を申し出た奇妙な老人。

そいつは“巨人”の支配する地域の近くの村に住んでいたイスラームの導師で、あまりのずさんな計画に途方に暮れかけていた俺が彼の申し出を承諾するや、驚異的な行動力で現場までの案内、火器や帰りの足の確保、果ては近隣の駐留軍への宣撫工作じみたことまでしてくれた。協力の理由を訊いても、神の御心のままに、と答えるばかりで、何の見返りも求めなかった。

彼がいなければ、俺は“巨人”を始末したあと現地で迷子になるか、軍か警察と一戦まじえることになっていたかもしれない。

「長らくKGBに使われていた男だ。金にはうるさいが、あの種の仕事に関しては相当な腕っこきだ……お前が見た通りにな」

肯定し、唇の端だけつりあげるジョゼッペ。目は全く笑っていない。俺の知る、いつもの奴の笑み。

「他言無用だぞ。イスラーム神秘主義と結託したとか何とか、馬鹿な嫌疑を上からかけられても不愉快だしな」

肩をすくめ、執務室を出た。そこでふと気がつく。

俺は結局、奴のてのひらの上で踊らされていただけじゃないのか。怒り心頭で奴のもとにおもむきながら、結局なだめられ、丸め込まれて部屋を出ることになった。

あの修道士の話は思いつきの寓話だったのかもしれないし、途中、あの対峙の際に自ら戦闘を放棄したのだって、間をはずし、俺の氣勢を殺ぐためにあえてとった行動でなかったとは言い切れない。無意識にやったにしては、タイミングが絶妙すぎた。

廊下を歩きながら、大きく舌打ちする。

ジョゼッペ 狡猾で抜け目ない糞野郎。秩序と混沌、理性と狂気、温情と無慈悲が混在する、俺のメフィストフェレス。

だが、奴は俺のことを誰よりも知り抜いている。それは動かしがたい事実だった。

その部屋は書庫と呼ばれていた。

室内にところせましと林立した書架に、整然と並べられた蔵書。他にあるものといえば、読書灯だけをのせた飾り気のない長机と椅子　呼び名そのままの用途の部屋。

手探りで壁のスイッチを押し、電灯をつけた。天井から無造作にぶら下がっている裸電球がぼんやりと書庫の中を照らし出すと同時に、書物独特のかびくさい臭いが鼻をつく。

書庫　埋葬機関庁舎の三階をまるまる占めるこの部屋には、古今東西のあらゆる化物がらみの資料が無数に保存されている。グーテンベルクの時代から存在するんじゃないかと思わせる古い書物まであるが、そんなものは（その歴史的価値はさておき）現場での化物退治には糞の役にも立たないことを俺は経験から学んでいた。

それでも、俺はこの十年、庁舎に来るたびに必ずここに足を運んでいる。

その理由は分かっていた。無意味なことも分かっていた。だが　俺は今日もこの部屋に来ていた。

書架に歩み寄り、適当に何冊か取って長机にのせる。椅子に座ってそのうちの一冊を読み始めた。

黄ばんだページに印刷された活字は全てラテン語だったが、俺は苦もなくそれを読むことができる　別に、真面目に勉強したからではない。俺はラテン語はおろか、いま日常的に使用しているイタリア語すら、まともに学習したことはない。

にもかかわらず、俺がラテン語を読み、イタリア語で会話し、さらにはその他のヨーロッパの言語も操れるのは……ロアと呼ばれた、あのろくでなしのおかげだった。

正確に言えば、シキ　俺の影、もう一人の俺を殺して奪い返した、魂の半片にこびりついていて、ロアの記憶の残滓。

残滓とはいえ、八百年を生きた魔道師の記憶である。その情報量は膨大なものだった。しかも、俺が取り込んだのはロアの記憶　すなわち魂に刻み込まれた情報だ。教科書を丸暗記するのとはわけが違う。

そういった次第で、俺は労せずして諸言語を完璧に習得しただけでなく、一生かけても得られない量の魔道の知識を手に入れた　そちらは俺には何の用もなさなかったが。知識というものは、いくらあったところで、それを活かそうとする意思がなければ、ただのお題目と変わらない。

ともあれ、ラテン語が読めるということだけは、今の俺にとってはありがたい話だった。この書庫にある蔵書　ほとんどがラテン語で記述されている　を支障なく読むことができるのだから。その点は、ロアに感謝していいだろう。俺の人生を台無しにしたことを帳消しにするほどの感謝じゃないが。

そんなことを考えながら、手にした書物の文字を丹念に目で追っていく。どの書物にもわずかしかない、目当ての記述を探すために。

俺の目当てはロア、そしてネロに関する記述　そして何より、時おりそれらの付記というかたちで存在する、あいつに関する記述だった。

数ある吸血種の中でも最高クラスの実力を持ち、吸血種としては変り種である前者二人に関する記録は比較的豊富で、見つけやすいのだが、あいつ　　白い姫、アルクェイド・ブリュンスタッドは、どうやら法王庁の常識では単なる伝説、与太話と見なされているらしく、ほとんど記録がない。

無いものは仕方ない、と素直にあきらめられるぐらいなら、こんな人生を送ってやしない俺は蛇よりも執念深い。

この書庫の中にある口アやネ口の記録を一字一句たどり、それに関連して登場するアルクェイドを探し出す　　この稼業についてからの十年、仕事をしている以外のほとんどの時間をこの無為な作業に費やしたおかげで、この書庫にある莫大な書物の中のどれに、あいつに関する記述があるのか、そらで覚えてしまったほどだ。

無意味だということは分かっている。摩滅しつつある脳細胞の無駄づかい　　だが、やめようとは一度も思わなかった。

ここでこうしている時だけが、唯一俺が生らしきものを実感できる瞬間なのだ。

無味乾燥なラテン語の羅列の中から、去っていったあいつのイメージを再構築し、二度と聞こえぬはずのその声を聞き、その匂い、その体温を間近に感じる　　そうやって現実から遊離している時だけ、俺の死に絶えてしまったはずの感性がよみがえり、闇も、“死”も、いやらしい頭痛も、ジョゼッペもない暖かな空間の中で、甘美なあいつの夢を好きなだけ貪ることができる。

その瞬間のために、俺は生きている。

そうしている時だけ、俺は生きていると感ずることができる。

こんな人生を送っているのも、結局は同じ理由だった。神秘に満ちた超常の世界に身を置き、去っていったアルクェイドを、少しでも身近に感じていたいという想い。

だが、最初はそうじゃなかった。少なくとも、こういう人生を送ることを選んだのは、もっと別の事由からだった。

あいつのいない世界への、底なしの倦怠と絶望。癒しがたい血への渴望を持った、生まれながらの殺しのサラブレッドである俺。そして、それを見越した上での、ジョゼッペの誘い　　それらこそが、十年前、俺にこの道を選ばせたのだ。

人生には途中いくつか岐路があり、そこにおける選択で運命が変わる　　嘘っぱちだ。

少なくとも俺のような存在にとって、人生は一本道だ。途中で分岐らしきものがあるにしろ、それは単なる通過点であり、どれを選ぼうとも行き着く果てに待ち受けているのは同じ結果でしかない。

だが、ここで間違えたのではないか、ここならまだ引き返せたんじゃないかと思える瞬間は、確実に存在する　　それは大いなる幻想に過ぎないのだが。

俺にとっては、あの十年前の雨の日がそうだった。

学校の教室での、アルクェイドとの最後の逢瀬　　そして、あいつ自身の口から永遠の別離を告げられたあの日から、ひと月ほどたった雨の日。

その日、俺は突然ふってきた夕立の中を、傘もささずに帰途についていた。

アルクェイドのいない世界、血に飢えた殺し屋の俺が、本来いるべきではない平穏な現実の世界　　そこで生きていくべく、俺は惰性で学校に行き続けていたのだ。

ずぶ濡れなのに急ぐこともなく、歩道を行く俺の横に一台のセダンがすべりこんできた。外交官ナンバーをつけたランチア・カップ。何かを感じて立ち止まり、そちらに目を向ける。

ランチアのウィンドウがあり、運転者がそこから顔を出す。忘れもしない酷薄な顔を。

一目で分かった。こいつは、俺と同種の存在。あいつのいた、あの世界に住む男。

明らかに外国人だと分かるそいつは、何の感情もない灰緑色の瞳で俺を睥睨し、唇の端だけを動かして、言った。

『お前が遠野志貴だな』

言葉はイタリア語で吐かれたものだったが、俺はその意味するところを完全に理解した。意識することなく、そいつと同じイタリア語が自然に口をついて出た。

『………そうだとしたら？』

運転者は顎をしゃくった。乗れ、ということらしい。

俺は考えることもなく、ランチアの助手席に乗った。

あからさまに怪しい男が運転する、あからさまに怪しい車に乗る　　俺がなろうと無駄な努力をしている、健全な学生なら決してしない行為。

だがやっぱり、俺に健全な学生のふりをするのは無理だった。その男から、あいつのいた世界の香りを本能的に嗅ぎ取ってしまった以上、それに抗うことができるはずもない。ひと月やっただけで、自分をごまかし続けることに倦みきっていたとなればなおさらだ。

自分もだませないような嘘はつくべきではない、と誰かが言っていた気がする　　誰が言ったかは、遠すぎてもう思い出せないが。

俺が助手席に座ると同時に、ランチアは再びしのつく雨の中を走り出した。

『“死”が視えるそうだな？』

おごそかともいえる手つきでシフトをくりかえしながら、そいつは単刀直入に訊いた。

俺は答えず、ウィンドウ越しに雨にぬれた街並みを見やっていた。答えるまでもなく、こいつはそれを知っている　　何故か、そういう確信があった。

『報告は受けている。遠野志貴。死を視る魔眼を持つ、この国で最も優れた魔狩人の一族の末裔。ネロ・カオスを殺し、ロアを消し去り………伝説の白い姫すら屠った男』

何の感情もこめられていない声。俺の返事を期待している様子はみじんもない。

ただ、こいつは伝えたいだけなのだろう。俺、遠野志貴が何者なのか知っている　　ただそれだけの事実を。

俺がアルクェイドを殺したことになっている、という誤解を訂正する気はおきなかった。直接手を下したのはロアだし、第一あいつは死んだわけじゃない　　だが、ある意味では

俺が殺したようなものだ。

俺が気になることは、ひとつだけだった。

『…………誰がそれをあんたに報告したんだ』

『お前が知る必要はない』

にべもない返事。奴は俺を見ていない。俺も奴を見ない。行き交うのは言葉だけ。

『けつのでかい、パン屋の娘か？』

俺の問いに、奴は答えなかった。ただ肩をすくめただけ。俺はそれを肯定と受け取った。

シエルの馬鹿め、何の冗談で、俺があいつを殺しただなんて報告しやがったんだ？ 一部始終を見ていたくせに。自分がロアを殺したくせに。

自分の手柄を放り出してまで、嘘がつきたかったのか。嘘を重ね続けるうちに、病的な虚言癖が身についてしまったのか だとしたら、お前は俺以上の大馬鹿だよ、シエル。

そこで、心中でシエルを罵るのをやめた。嘘にまみれたシエルの笑み 暖かい、ひなたの匂いのする笑み。そいつを思い出したからだ。

いつだって、真実よりも嘘の方が美しい。その美しい嘘、美しい幻影を汚したくなかった。シエルがどんな嘘をついていたとしても、俺はその嘘が好きだった。あの女の嘘は、みんな暖かくて、いい匂いがした それで充分だった。醜いだけの、毒にも薬にもならない真実など、知りたくもなかった。

『で、パン屋の娘は今どうしてる？ 首でも吊ったか。それとも、掟破りでお前ら教会の人間に抹殺されたか』

奴はそこで大きくステアリングを切った。ランチアを左折させ、大通りに出る。その一連の動作の中で、そいつの左腕の動きがわずかにぎこちないのを、俺は見てとった。

『…………我々はマフイアとは違う。 “沈黙の掟” なんてものではないし、そのために誰かを殺したりしない』

奴が答えたのはそれだけだった。相変わらず、シエルのことにはふれない。だが、俺はしつこく食い下がる。

『じゃあ、どうなったんだ。まさか今でも化物殺しに精を出してるのか？』

灰緑色の眼がちらりとかちらに向く。うるさいと言いたげに、わずかに眉根をよせている。だが、つかみかからんばかりの俺の様子を見て、仕方ない、というふうに口を開いた。

『その報告者からの伝言だ。お前とは、二度と会いたくないと』

胃から血の気が引いた 浮かんだのは、俺に背を向ける、カソック姿のシエルのイメージ。

シエルもまた、俺の前から去っていったのだ。アルクェイドと過ごした、短くかえがえのない日々の、最後の生き証人が。今度こそ本当に、あの日々は俺の記憶の中だけの幻影になるうとしている。うんざりするような現実の冷たい手が、全身を押し包んだような気がした。

『そうか…………』

口にできたのはそれだけだった。身体から力が抜けていく。肉体がゼリーのようになり崩れて

しまう気がして、革のシートに深く背中を沈めた。

ただ、帰りたかった。有間の家でもなく、遠野の屋敷でもない場所に帰ることを、痛切に願った。どこに帰りたいたのかは、自分でも分からなかった。

奴はこちらを一度、横目で見たとようだ。だがそんなことはどうでもよかった。アルクェイドを喪い、シエルも去ったという現実の前では、この野郎が俺を見ようが見まいが、そんなことはどうでもよかったのだ。

シートにもたれながら、濡れそぼつ街並みを見ていた。何も考えられなかった。何も考えたくなかった。

ランチアが再び左に鼻先を向けた。大通りぞいの広大な駐車場に入り、適当なスペースに突っ込む。

この駐車場は知っていた。フロントガラスの向こうに目を転じると、見覚えのあるパチンコ屋のネオンサインが見える。今のご時世、景気がいいのはパチンコ屋と葬儀屋ぐらい

俺が考えたのはそんなことだった。

奴はエンジンを切らなかった。ランチアをアイドリングのまま停止させ、ふところから細巻を取り出し、火をつける。いがらっぽい臭いが車内にたちこめ、俺は助手席側のウィンドウを全開にすることで無言の抗議を行った。

しばし、奴は言葉を発さなかった。ただ、前方に目を向けながら細巻をふかし、紫煙をフロントガラスに吹きつける。それを無言のまま繰り返していた。車内を満たす、静寂と雨音。開けばなしのリアウィンドウから吹き込む雨が俺の顔を濡らす。

『……………続けられそうか？』

突然、奴が言った。こちらに目もくれず、唇の端だけでしゃべっているのは変わらない。

『何がだ』

『平穏な生活というやつを』

その言葉で分かった。この男が、何のために俺の前に現れたのかが。

そして気づいた。俺は、今までこれを待っていたのだ。このような男の出現と、こういう成り行きを。

『無理だな。まだ一ヶ月だが、もう挫折しかかっている』

俺の言葉に、男は唇をゆがめた。顔の他の部分は微動だにしない。笑ったのだということに気づくのに、数秒を要した。

『当然だ。……………ここはお前のいるべき場所ではないんだからな』

『俺はずっと、自分がこちら側の人間だと思ってたんだが』

奴は鼻を鳴らした。

『お前はただ、知らなかっただけだ。自分が何者か、何のために生まれてきたのかをな。……………だが、一度自らの内奥にある深淵をのぞいてしまったからには、今さら引き返せはしない』

反論はできなかった。浮かんだのは、深夜の学校で聞いたシエルの言葉だけ。

“あなたは、こっち側に来ちゃいけない人です” そらぞらしい言葉。やっぱりあの女は嘘つきだ。

今なら分かる。わざわざ行くまでもなく、俺は生まれた時からあちら側にいる人間だったただ、それに気づいていなかっただけなのだ。

そんな、分かりきっていたはずの結論から目をそらし、間抜けにも平凡な学生を演じようとしていた自分の馬鹿さ加減が無性におかしくなり、俺は笑った。声をあげて笑った。笑い声は次第に高くなり、気違いじみた哄笑へと変わっていった。視界の隅で、奴が小さく肩をすくめるのが見えたが、かまわず笑い続けた。

『気がすんだか？』

ひたすら笑い続けた末、死にかけたカラスのうめきに似た声しか出せなくなった頃に、奴は声をかけてきた。

『ああ、すっきりしたよ。話を聞こうじゃないか………とりたいところだが、俺はまだあんたが何者かを聞いてない』

笑いすぎて口元に飛び散った唾液をぬぐう俺を、奴は初めて真正面から見すえた。今まで何の感情も宿していなかった灰緑色の瞳の奥に、言葉では形容しがたい何かが渦巻いている。

『お前より弱い男だ』

不自然なほど明瞭な声音。そして、俺がその言葉の意味を問うより先に、着ていたツイードのジャケット（今から思えば、死ぬほど似合ってなかった）の袖をたくしあげ、左腕をさらす。

初老とおぼしき相貌からは想像もつかない、筋肉質の前腕。そこにあったのは古い傷痕。それが何による傷か　そしてこの男が言わんとしたことが分かった。

巨大な動物の歯型とおぼしきその傷は、そっくり同じものが俺の腕にもある　ネロの黒犬の噛み跡。

『彼我の実力差をかえりみず、戦いを挑んだ………その代償がこれだ。それまで負け知らずだったせいで、慢心していたんだな』

たくしあげた袖を戻しながら、奴は自らの敗北を語った。

『悪運強く死なずにはすんだが、もう現役でやれる身体ではなくなった』

言葉少なだったが、俺には分かった。

たった一度の敗北によって全てを失った男。しかも、目の前にいる俺のために、復讐すらかなわない。やり場のない憤怒、憎悪、屈辱、絶望　淡々とした口調の中に、それらが胸が悪くなるほど色濃くにじんんでいた。

『あいつは　ネロは人間のかなう相手じゃない』

慰めにもならない言葉を口にすると、奴は手にしていた細巻の火先をダッシュボードに叩きつけた。

『そんなことは分かりきっている。大事なことは敗北そのものではない。戦うべきかそうでないかの判断だった。それが分かっていたはずなのに、私は、あの怪物と戦うという愚拳に

出た 問題なのはそこなんだ』

手にした細巻をダッシュボードにこすりつけ、荒々しくもみ潰しながらまくしたてる。皮膚を圧するほどに伝わってくるのは、鬱積した末に、自己への呪いに変質した負の感情 俺にもなじみの心理。声は平静そのもので、能面のように無表情なのがかえってそれを際立たせていた。

『あの常識外れの化物を殺せるのは、それ以上に非常識な化物だけだ』

非常識な化物。俺に対するあてつけであることは、火を見るより明らかだ。

『……わざわざヴァチカンくんだりから、俺に喧嘩売りにきたのか？』

言いながら、ゆっくりとシートから身を起こす。手は自然とポケットの中いき、そこにおさめられているナイフの感触を確かめていた。

『そうじゃない』

俺の動きに気づいて、奴は相好をくずした 唇だけのいびつな笑み。

『じゃあ、何の用だったんだ。俺を化物狩りの後継者にでもするか。それとも、俺を殺して昔の因縁を清算するつもりか？』

奴は手にしていた細巻の残骸を捨て、俺に顔をよせた。灰緑色の瞳が、ねばい光をたたえて俺を見ている。

『道を示しに来たんだ、お前に』

『……坊主みたいな言い草だな』

言いながら、思わず目をそらした。別に顔を近づけられて不快だったからではなく…… 奴の眼を見ることが耐えがたかったのだ。

その眼の奥にある、底なしの暗黒 俺はそれを忌避しながら、同時に惹かれてもいた。自分が同じ眼をしているのでは、という恐怖と、あの世界に住む、自分の同族に逢えたという安堵。二つの奇妙な感情の相克は、俺をひどく落ち着かない気分させた。

奴は身を引いた。そして足元の床に落ちた吸殻を拾い上げ 思い出したように、私は司祭なんだ、と小さなつぶやきをもらした。それは、どこか恥じているような口ぶりに感じられた。

『……俺に教会の殺し屋になれと？』

シエルが口にした、“埋葬機関”という名称は、あえて用いなかった。この男の属する組織が本当にそう呼ばれているのか、確証がもてなかったのだ。嘘つきシエル あの女の言葉はどこまで本当か分からない。

『好きなようにとるといい。……私が訊きたいのは、お前は本来いるべき場所に戻る気があるのか否か。それだけだ』

奴は自分の側のウィンドウを開け、吸殻を投げ捨てた。

『……もし俺が断ったら？』

言いながら、自分にそんな気が全くないことに気づいた。それを見透かしたように、奴はまた唇をゆがめる。

『かまわん。可愛い妹と給仕の娘がいる、あのすてきなお屋敷に帰るといい。……いつの日か血の渴望に負け、妹を手にかけないことを祈りながら』

妹　　瞬時にわきあがる、秋葉のイメージ。同時に、あの甘美な頭痛と、どす黒い昂ぶりが首をもたげる。

秋葉　　俺の妹。俺と同じ、ヒトとは呼べない異形の存在。

俺が思い描いた秋葉は、目がくらむような鮮やかな赤色に染まっていた。赤は秋葉の色。俺の望む色。赤い髪の秋葉。

赤く血塗られた秋葉　　俺が望んでやまない、秋葉の姿。

刹那、イメージの中の秋葉はばらばらになる。文字通りばらばらに。血の海の中にぶちまけられたはらわたを中心に散らばる、マネキンじみた手足の白さがなまめかしい。赤いイメージの中で、ナイフを手にした俺は、切り刻まれた秋葉の残骸を見下ろしてにやにや笑う。そして手をのばし、地面に転がった秋葉の生首を

そこで我に返った。目の前では、奴が笑みを浮かべている。

『好きなんだろう、そういうのが？』

歯をむき出して笑いながら、奴は言った。そのゆがんだ笑顔は、俺が秋葉に対していただいている、あさましい欲望を全て見通していると告げていた。

分かっていた。こいつもそうなのだ　　ヒトならざる存在を切り刻み、殺すことで勃起する変態野郎。

醜かった。汚らわしかった。そして　　許せなかった。

こいつは今、俺もまたそういう人間であること、俺が同じ目をしていることを思い知らせたのだ。奴は、俺の最も暗く、醜い部分のカリカチュア　　ゆがんだ鏡像だった。

許しがたいという思いは憎悪に変わり、憎悪はたやすく殺意にすりかえられる。

そして　　殺意は肉体をつき動かした。

勢いよく頭を振って眼鏡を払い飛ばし、ナイフを取り出すや刃を開いて斬りかかる。

奴はそれを予測していた。役立たずだと思っていた奴の左手が、恐るべき速さでナイフを持った俺の右腕をつかんでねじあげ、右手は俺の喉首を絞めあげる。

後頭部をバックレストに力任せに押しつけられた。関節の限界までひねりあげられた右手から、ナイフが落ちる。食い込む指の人間離れした握力を感じながら、俺はこいつを殺しきれなかったネ口のふがいなさを呪った。

今にも殺しかねない勢いで俺の首を絞めていながら、無数の“死”の点に飾られた奴の顔は全くの無表情だった。

『いいか。どうしようとお前の勝手だ……だがこれだけは忘れるな』

ささやき　　遠のく意識の中に見えるのは、ぎらぎら光る灰緑色の瞳だけ。奴の声は奈落から響いてくるようだった。顔にかかる奴の吐息は、死の臭いがした。

『生き方は選べない。選べるのは……死に方だけだ』

視界が暗くなっていく。奴のささやきだけが恐ろしく明瞭に鼓膜に響き、狂った旋律とな

って俺の脳内をぐるぐる回る。

そこで、奴は手を離した。解放されたひょうしに、俺は激しくむせ、酸素不足で明滅する視界を何とかしようと、目を何度もしばたいた。

乱れた衣服を整え、運転席に元通り腰をすえると、奴は二本目の細巻に火をつけた。そして足元の床に落ちていた、俺の眼鏡を拾ってさしだす。俺はそれをひったくった。

『そろそろ、返答が聞きたいのだが』

まるで何事もなかったかのように、落ち着いた口調。何に対する返答かは、当然分かっている。

ここでイエスといえ、俺は奴の言う“本来いるべき場所”に帰る ようするに、楽しい化物殺しを稼業として生きることになる。具体的なことは何も聞いてないが、間違いはない。

つっぱねるべきだ。声に出さずつぶやいた。たとえ発狂するほどの殺意に駆られてようと、そんな人生は送りたくない。しかも、こんな糞野郎と一緒に。

だがそれは、自分でもあきれほど実感のわからない言葉だった。俺の脳内ではまだ、先程の奴の言葉が回り続けている。

選べるのは死に方だけ 普通なら、逆だと考えるだろう。人は自らの生き方を選び、そして最後は選べない死という結末をむかえる。それが人生だと。

だが、それは真実じゃない。

他の人間がどう考え、どう生きていようこの際関係ない。少なくとも俺達にとって、人生には選択の余地なんかありえない。

何故なら 俺達は生き方を選ぶには、あまりに邪悪にすぎる生き物だからだ。あまりに血への渴望、殺戮の衝動が強すぎて、生き方など選べないのだ。

この一ヶ月、俺はその事実が肌身にしみていた。平穏な日々は、俺にとって地獄と同じだった。日常の一瞬一瞬を、突発的にわきあがってくる殺意を抑え込むことに費やしてきた。空回りする意思と、絶えることのない頭痛の日々。

奴の言った通り、俺はもう限界だった。

死に方は選べる。この瞬間、俺は確信した。今のままの暮らしを続ければ、近いうちに俺は狂い死にするか、さもなきゃ自分の喉笛を切り裂くことになる。

だが、今ここでこいつと同じ道に行くことを承諾すれば、少なくとも自分にふさわしい場所で、ふさわしい死に方ができる。秋葉ではない別のヒトならざる者どもを切り刻み、その快楽に飽きるまでおぼれ続けた末に、人知れず死んでいく それこそが俺のあるべき死に様であり、正しい人生のありかたというものだ。

笑った。考えるだけ無駄だった 答えは、最初から決まっていたのだ。

『…………行くよ、あんたと一緒に』

奴の顔がこちらを向く。唇だけをつり上げた、この上なく醜怪な笑顔が俺の眼前にある。

俺は思った。この世で最も邪悪な存在 そんなものがあるとしたら、こういう顔で笑

うんだらうと。

ネロやロア、その他の化け物どもだって、こんな顔で笑いはしなかった。

ネロは俺を殺し、喰らおうとした。ロアは俺という存在を消し、肉体を乗っ取ろうとした

だが、今日の前にいる奴が俺にしたことに比べれば、そんな行為は兇戯に等しい。

この男は、俺の魂の中にある、最も醜く汚れた部分を引きずり出して見せつけ、それが俺そのものであることを思い知らせ、そしてそれとともに生きるよう仕向けた。

これを邪悪と呼ばずして、何をそう呼ぶのだ？

人は言う。悪魔は人間を誘惑し、墮落させるのだと。

でもそれは間違っている。人間を誘惑し、人間を墮落させ、人間を破滅させるのは、いつだって同じ人間なのだ。

俺は知っている。魔と呼ばれる者達の方が、人間よりもずっと清純で、ずっと道義をわきまえており　　そして正常だ。

彼らは人間を殺し、喰らうが、それは自然の<sup>こむら</sup>理の範疇にある、いつてしまえば単なる食物連鎖の一環にすぎない。奴や俺が彼らを殺すのとは、根本の部分で異なる行為である。

真に邪悪なのはこの男であり、そして俺だ。

『私はアントーニオ・カリアーニ司祭……人からは“ジョゼッペ”と呼ばれている』

思念をさえぎるように、右手が俺にさし出された。ためらいなく、その手を取る。

奴の手は思ったより小さく、なめらかで　　骨まで凍るほどに冷たかった。わけもなく気分が高揚し、発作的な笑いがこみあげてくる。

『我らのクラブへようこそ』

奴が言うと同時に、その手を強く握った。

きっと、俺はこいつと同じ顔で笑っているのだらうと思いつつ。

あの日から、もう十年以上の月日が過ぎ去った。

ジョゼッペと握手をかわし　　自分の魂を売り渡す契約をしたあの日から、十年。

俺は自分が望んだ通りの人生を送った。自らを鋼鉄のように鍛え上げ、くる日もくる日も化物どもをぶち殺した。自分の強さと、殺戮の快感に思うさま酔った。

そして飽いた。殺しを重ねるうちに刺激と快感は麻痺していき、何の慰めももたらさなくなる。それでも殺意の衝動はおさまることなく、かえって大きくなるばかりで、それに比例して頭痛もひどくなっていく。

生きる目的を見出しようもない人生　　だが殺しだけはやめられない。

俺に残されたものは、過去の記憶だけだった。

惰性で生き、惰性で化け物どもを殺す日常の中で見る、アルケイドの幻影。

あの、駆け抜けたような短く、鮮烈な日々の一瞬一瞬を克明に思い起こし、あいつの表情の一つ一つ、あいつの口にした一言一言を反芻する　　それだけが俺の救いだった。それ

だけが、冷たい暗渠にうずくまるようにして過ごした人生の中で、唯一のぬくもりとなったのだ。

ようするにこういうことだ。俺は夢幻の中で生きているのであり、現実の全てはその夾雑物に過ぎない　そしてそれは、生きていないのと同じことだ。

あいつは言った。

“ なんの意味もないけど、それはきっと、きっとすごく楽しいよ ”

苦い笑いがこみあげてきた。

やっぱりあいつは、何も知らないお姫様だった。何の意味もない日々　それ自体が苦痛となるような人生もあることを、あいつは知らなかったんだ。

そして現在も、俺が地べたで這いずり回っているのも知らずに、あいつは美しい夢を見ながら眠りにについている　それは、距離的なもの以上に、深く絶望的な乖離だった。

『地獄とは、場所をさした言葉ではない。ある種の生き様のことを、そう呼ぶのだ』

いつぞやの、ジョゼッペの声が脳裏にこだまする。

哀しい話だが、アルクェイドの言葉より、腐れシチリア野郎のとち狂った人生観の方が、はるかにリアリティを帯びていて　俺の世界の言葉だと感じられた。

地獄か。つぶやいて、立ち上がる。部屋の電気を消し、読書灯も消した。一切の明かりが消え、書庫の中は真っ暗になった。再び、椅子に腰をおろす。

俺は両手で顔をおおった。

泣きたかった。そこらにいる普通の、弱く愚かな男のように、自らの人生を嘆いて泣きたかった。

だがやはり、涙が流れることはなかった。出たのは、声にならないうめき声だけだった。

暗闇の中でしばし、そのままの姿勢でいた。だが、そこでどれだけそうしていても、何の変化も訪れなかった。何の救済もありえなかった　当たり前の話だ。

そんなものは、どこに行ったってないのだから。

どれだけ、その姿勢でいたんだろうか。ドアの開けられる音で、俺は我に返った。

「……………また、ここにいたのか」

書庫に入ってきたのはジョゼッペだった。部屋の電灯はつけようとしな。廊下の灯りを背負ったかっこうとなった奴の顔には影がさして、どんな表情を浮かべているのか見当がつかない。

「何の用だ」

ゆっくりと、てのひらから顔を上げた。奴は顎をしゃくった。

「車を動かしてくれ。見たと思うが……………あのシトロエンの持ち主が帰るに帰れなくなっている」

言葉の意味を理解するのに数秒　ようやく、先立って自分がやらかしたいはずのこ

とを思い出した。

「……………あんたの車を動かしてやりやすむ話だ」

奴は首を振った。

「私の車は今、動かせん。デストリビューターがだめになっていて、エンジンがかからん」

奇妙な違和感 一般にドイツ車は頑丈だと思われているが、決して万能じゃない。一部の部品は消耗品と見切られていて、あきれられるような品質のものが使われていたりする。だから手入れを怠れば、その手のトラブルには、かなりの確率で見舞われる。

だが……………この男、ジョゼッペがそれを知らずに、こんなへまをやるだろうか？

疑念をすぐに打ち消した。何を疑い、どうあがいたところで、俺は死ぬまでジョゼッペのひらの上で踊るだけなのだ。信用ではなく、投げやりな諦念が、奴への猜疑心をおおい隠す いびつな信頼関係。

「さっさと後片づけをして、下におりてこい」

背をひるがえした奴に、俺は声をかけた。

「待てよ。聞きたいことがある」

奴は立ち止まり、振り向いた。俺は不意に浮かんできた疑問を、その横顔にぶつけた。今まで問おうとしなかった、長年の疑問を。

「何故、“ジョゼッペ”なんだ？ 本名はアントーニオなんだろう……………それとも、そっちの方が本名なのか？」

数秒の沈黙があった。奴は半身になっていた身体を全てこちらに向け、数歩、寄ってくる。

「どちらも本名ではない」

書庫の半ば近くまで進んできた奴は、すっぽりと闇に包まれている。表情も闇に飲まれ、唇のわずかな動きだけが見える。

「私はパレルモの生まれだ。親の顔は知らない。いわゆる浮浪児だった」

俺の問いに直截に答えず、奴は自らの過去を語り出した。

「その私に、路地裏での生き方を教えてくれたのは、同じく浮浪児の、年長の少年だった。彼が、盗みのやり方、ねぐらの見つけ方、危険の避け方 生きるのに必要な知恵を、全て私に与えてくれたんだ」

奴の少年時代のことを聞くのは初めてだった。思い出話をするような男じゃないし、俺もそんなことを訊こうとは思わなかった この戦闘機械に子供の頃があったなんて、誰が想像できる？

「だが、それも長くは続かなかった。ある夜、ヴェスパに乗ったどこかの馬鹿者が、すれちがいざまに棒切れだか鉄パイプだかで、その少年の頭を強打した……………酔った勢いの、悪ふざけでな。パレルモじゃそう珍しい話じゃない」

いつものごとく平静な声、闇に塗りつぶされたジョゼッペの顔 だが俺は、見えるはずのない、暗い光をたたえる灰緑色の瞳を見ていた。

「少年は死んだ。死に顔はひどいものだった。殴られた衝撃で、眼球が飛び出してい

た。……その少年が、ジョゼッペという名前だったんだ」

俺の手前で立ち止まっているジョゼッペ。廊下からもれる光で、奴の短軀の輪郭だけがうつすら見える。

その事実はありがたかった。今の奴がどんな顔をしているのか、今の奴の瞳に、何が燃えさかっているのか 絶対に見たくはなかった。

「その時から、私はジョゼッペと名乗るようになった。ジョゼッペと呼ばれていた少年が死に、彼を殺害した男を探し出して殺したその日から、私はジョゼッペとなったのだ。……その後、ヴァチカンから洗礼名の代わりにアントーニオの銘をもらった。だが、私は死ぬまでジョゼッペなんだ」

淡々とした口調で語られた過去。分かったことが一つだけある。

その少年が死んでから、止まってしまった奴の中の時間 この男もまた、自らの地獄の中で生きているのだ。

俺は奴を理解した。俺には全てが分かった。

ジョゼッペは再度、背をひるがえした。つかつかと戸口まで早足で歩き、そこで立ち止まる。そして振り返り、肩越しに俺を見やった。

「くだらん……過去が何になるというのだ」

苦い声で、そう吐き捨てた。それは過去にすぎり続ける俺と……己自身に対する唾棄の言葉に聞こえた。

「<sup>いま</sup>現在よりはましさ。少なくとも過去は、現在をもたらしはする……でも、現在には何も無いんだぜ？」

俺がそう応じると、奴は頬の筋肉をわずかにゆがめた。すぐに元の無表情に戻り、さっさと下りてこい、と小声で叱咤する。そして大股で俺の視界から消えていった。

廊下からの明かりだけで頼りなく照らされた書庫の中に、俺は独り取り残される。

何のけもなしに、目の前に積まれた書物の山を崩す。あいつの記述のある書物を。

アルケイド。あいつの存在が、この十年間、俺の中の虚無を満たしてきた。あいつの夢を見ることが、俺の全てだった。

だが今は、何故かいつもより遠く感じた。

#### 4

庁舎の外に出ると、すでに日は暮れかかっていた。夕陽で真っ赤に染まった路地に、駐められている三台の車。俺がここに来た時と、何ら変わった様子はない。

ため息ひとつ。煙草をくわえ、火をつけた。数時間ぶりに紫煙を深々と吸い込んだところで、耳をつんざくような嬌声が響きわたる。

「あ～っ！ 志貴だあ！」

思わず、手にしていた煙草を取り落とした。言い終わるやいなや、硬い靴底が石畳を叩く

音を騒々しく鳴らしながら、声の主はこちらに近づいてきた。

俺はあえて、そちらに目を向けなかった 何だか、ひどくいやな予感がしたからだ。

「はろー、志貴」

足音は俺の横で止まった。声は、シロップまみれの砂糖菓子を思わせる、甘ったれたアルト 聞くだけで胸焼けがしそうだった。

あいさつの言葉がかけられてもなお、俺はそちらを見ようとはしなかった。

「ねえ、志貴ったら。ねえ！」

声は俺の横、一メートルから。それでもまだ、頑として視線を動かさない。足元に転がった煙草が燃え尽きていくさまを、ただひたすら凝視し続けた。

業を煮やしたのか、声の主は俺の正面に回りこんできた。否応なしに、そいつの容貌を視認させられることとなる。

そいつは（声で分かっていたが）女だった。しかも若い、とびきりの美女だ。

漆黒の豊かな髪と、病的に白い肌。大きなサファイア・ブルーの瞳と、血を刷いたように赤い唇。作り物めいてすらいるほど、整った顔立ち。

身体つきの方もまたすごかった。ボディラインを強調する、黒いタートルネックのセーターの下で（重力の意味について神に問いたくなるような）巨大かつ、かたちよい乳房が息づいている。それに反し、アブノーマルにくびれたウエスト。この女の内臓が全てそろっているかどうか、神に問いたくなかった。

当然、下半身の方も見事に発達している。

肉づきのいい尻のせいで、今にもはちきれそうになっている、馬鹿みたいに短いタイトスカート。そこからのぞく長い脚は、脂肪と筋肉が絶妙な具合にブレンドされ、理想的なラインを形成している。

モデル向きではないだろうが、官能という観点からみれば、女の肉体は完璧そのものだった。

直感 この女は危険だ。

これほどの完成度の肉体 エクササイズや整形手術では、決して作りえぬほど完璧な美貌と肢体が、この世に存在する理由があるとしたら、ひとつしか思いつかない。

何のことはない。魔術、あるいはその他の超自然的な手段によって、人為的に作り上げたのだ。そんなことをした理由も、やはり思いつくのは一つだけだ 俺のよく知っている、ある目的のため。

つまり、こういうことだ。この女は、俺やジョゼッペと同種の存在 人工的に作り上げられた肉体を持つ、歩く殺しの機械。

その肉体がここまで官能性を帯びているのは、（製作者が自分の趣味を出したんじゃないけりゃ）本来の目的の、偶発的な副産物にすぎないのだろう。

「志貴、志貴！ お～い、聞いている？」

甘い声でかなでられる、耳ざわりなアメリカ英語で我に返った。

女は自分の肉体をにらみついている俺の顔の前に手をかざし、ひらひら動かしている。まるで、俺がラリっているとでもいいだけに。

無言のまま、女の手を自分の顔の前から押し除ける。すると、女は俺の右手をそのままとって、両手で握ると上下にぶんぶん振った。

「あたし、キャル！　最後が「r」で終わるキャルよ。うづりは“軍”と同じ。本当はキャロラインだけど、キャルって呼んでね。あたしその方が好きだから！」

コカインでハイになったジャンキー顔負けのテンションで、女は一気にまくしたてた。その間、両手で握った俺の手を振り回しながら。

「志貴って、話で聞いてたよりハンサムね。ちょっと暗くて不健康な感じだけど、おいしいもの食べて、日光浴すればきっと良くなるよ！　……でも、今のままでいいかな。なんていうかさ、クールに見えるもんね！」

……<sup>ヤハツエ</sup>神よ、<sup>ジーザス</sup>イエスよ、なんだったら口アでもいい。誰か教えてくれ、見ず知らずの女にいきなりこんなことを言われた時、いったい何と答えりゃいいんだ？

天をあおぎ、苦悩する俺におかまいなしに、女は頬を紅潮させ、満面に笑みを浮かべている。その笑みひとつによって、整いすぎている顔立ちが与える冷やかな印象が失せ、えもいわれぬ暖かみのある相好へと変わる。

「よろしく、志貴。……仲良くしてね！」

異様なはしゃぎぶりとともに、いまだ続いている女の“握手”（だろう、たぶん）に黙ってつきあいながら、俺はこいつがいかなる存在かをゆっくり吟味した。

推論 1：この女はおそらく俺の“同僚”で、一応は俺のことを知っている。

推論 2：この女は白いアメリカ娘　この地上で最悪の部類に入る相手だ。

推論 3：この女は救いがたいほど馬鹿か、でなきゃ馬鹿の真似が天才的にうまいかだ。

最終的結論　　どうやら、俺はかなりやっかいな事態に直面しているらしい。

考えてもみろ、こいつは俺の同業者……それも、ほぼ確実に埋葬機関の人間だ。ということは、俺の仲間ってことになる。それがどういうことが分かるか？

この女が俺の仲間なんだぞ！？

これは実に深刻な状況とっていい。敵よりも味方が脅威になりうるということは、往々にしてあるものだ　この女が単なる敵であってくれば、どれほど気が楽なことか。

頭を振った。女にはとりあわず、ジョゼッペを求めて視線をさまよわせる。

奴は自分の車のボンネットを開けて、エンジンルームをいじっているところだった。俺達のやりとりには、まったく関心を払っていない。

「ジョゼッペ」

はずしたプラグコードを点検していた奴が、顔をあげた。

「どうかしたか」

「……………何なんだ、この馬鹿は？」

あいた左手で女を示して、言った。キャル（普通、つづりは“c a l”じゃないか？）とか名乗ったが、俺は生涯その呼称を使うまいと決意した。たった今、固く自らに誓ったのだ。

「本人に聞け」

ジョゼッペはそっけなく言うと、今度は後部トランクを開けて、工具箱を引っ張り出している。

「くたばりやがれ、この畜生が」

俺は吐き捨てると、未だつかまれたままの右手を乱暴に振り払った。

女は一瞬、その行動に目を見開いたが、すぐに気を取り直し、にんまり笑った。五歳のガキが浮かべるような、何の知性も感じさせない笑顔だ。

「そっか。志貴はきっと、英語が上手に話せないんだね。……………でも、大丈夫だよ。あたし、イタリア語はだめだけど、他のいろんな国の言葉で話せるから」

うんうんうなずきながら一人合点し、女はジョゼッペの方に向いた。

「ねえジョゼフ！ 志貴はどこ言葉なら話せるの？ やっぱり日本語しか通じないの？ あたし日本語は“コンニチハ”しか知らないよ～。これじゃ自己紹介もできない！」

ジョゼフ、と英語式に呼ばれた奴は、いやいやといった風情で顔をあげた。そして言った。女にではなく、俺の方に顔を向けて。

「私が知っているだけでも、志貴は十数ヶ国語に通曉している。何ならバスク語でもかまわんぞ。アンドラの時、こいつが使ったのを確認している」

言うだけ言うと、奴は工具箱から愛用のドライバーのラチェットハンドルを取り出し、ソケットを取りつける。

奴が言ったことは嘘じゃない。俺はあの複雑怪奇なバスク語でも会話できる だがそれ以前に、今この女が使用している英語だって、俺がきちんと使えることを、奴は知っている。

いつも思うんだが……………ジョゼッペのユーモアのセンスは、何でこんなにもひん曲がっているんだろう？

「ず「ご「い！ 志貴ってば語学の天才なのね！」

ジョゼッペ一流のジョークに気づいたふうもなく、女は素直に感嘆の声をあげた。両のこぶしを顎にあて、眼球が落ちこちそうなほど目をいっぱいに見開いている。いかにもアメリカ人らしい、大げさな驚きのしぐさ。

そのしぐさは、何故だか俺の癪にさわった。不意にわきあがってくる、名状しがたい何か 脳がちくちく痛む。

俺は確信した。

この女は恐ろしく不快だ。

理由など分からない。分かりたくもない。きれいな顔も、官能の塊のような身体も、子供

より頭の悪そうな口のきき方も、関係ない。

とにかく、この女の全てが、俺の神経にひどくさわるのだ　　それこそ、今この場で殺してやりたくなるぐらいに！

「ねえ……じゃあさ、志貴は英語、話せるの？」

気づくと、女の顔が目の前にあった。今にも鼻先がふれあいそうな距離にまで、顔をよせてのぞきこんできている。

すきとおった碧い瞳。かすかに感じられる吐息は、ミルクの匂い。

普通なら、顔の一つも赤らめるべき場面かもしれない　　だが実際には、不快感がいや増しただけだった。腐った犬の屍骸でも見ている方が、いくぶんかましな気分になれたらう。

女の頭をわしづかみにして、顔を目の前から遠ざける。何か言いたげな女を制するように、鼻先にひとさし指を突きつけ、お望みどおりの英語でまくしたてた。

「いいか。俺は英語が話せる。キング・イングリッシュだろうがピジン・イングリッシュだろうがな。……だからって、俺が“は<sup>h</sup>じ<sup>o</sup>め<sup>o</sup>ま<sup>u</sup>し<sup>o</sup>て<sup>o</sup>”なんて言うと思ったか？　言っておくが、俺は白<sup>h</sup>ん<sup>o</sup>坊<sup>o</sup>が大嫌いだ。特にお前みたいなア<sup>u</sup>メ<sup>e</sup>リ<sup>o</sup>カ<sup>o</sup>人はな。しゃべりすぎる女も嫌いだし、その上け<sup>o</sup>つ<sup>o</sup>が<sup>o</sup>で<sup>o</sup>か<sup>o</sup>い<sup>o</sup>と<sup>o</sup>く<sup>o</sup>れ<sup>o</sup>ば<sup>o</sup>な<sup>o</sup>お<sup>o</sup>さ<sup>o</sup>ら<sup>o</sup>だ。俺の言いたいことが分かるか？」

突き出した指で、強く女の鼻を押した。かたちよい鼻梁がちょっとゆがむ。ふにゃ、という妙な声が聞こえた。

「つまり、お前は最悪だってことだ！　お前と話すつもりはないし、見ているだけでも吐き気がする！　分かったら、とっとと失せろ！　Fuckin' asshole！」

俺はきっちりと、アメリカ英語であいさつをした　　言葉のはしばしに“fuck”と“shit”を挿入し、頭韻を踏み、単語は知りうる限りの<sup>スラング</sup>俗語に置き換えた。

完璧なアメリカ英語だ　　我が脳内の万能なる全自動翻訳機、ミハイル・ロア・バルダムヨオンに乾杯。

かみつかんばかりの口調だったが、実際に激昂していたわけじゃない。一刻も早く、不快感の源であるこの女を追い払いたかった　　そう思った結果、出てきたのがそんな言葉だった。それだけだ。

女はまた、大きく目を見開いた。あまりの驚きに、声も出ないといった風情だ。

ここで罵詈雑言に怒りをおぼえた女は、(こっちの頬のひとつも張ってから)姿を消す

俺が期待したのは、そんな筋書きだった。これが、俺に思いつきうる限りで、最も平和的な展開だ。

数秒おいて、俺にあびせられた言葉の意味をはっきりと認識できたのか、女はむっとした表情をつくる　　だが、俺の期待通りだったのはそこまでだった。

女は、いきなり俺の脳天に手刀を見舞った。ずびし！とでも音のしそうな、間の抜けたアクションで。何故避けられなかったのか、自分でも不思議だった。

「もう！　そんな汚<sup>s</sup>わ<sup>w</sup>い<sup>e</sup>言<sup>r</sup>葉<sup>d</sup>sを使っちゃダメって、ママに言われなかったの？」

まるっきり子供扱いした口調で叱りつけられた。それこそ子供のように頬をふくらませ、女はぷりぷり怒っている。それはいいが、その怒りの対象が、俺の予想とは微妙に（いや、かなり）食い違っている。

再三言おう なんなんだ、こいつは！？

ふきこぼれそうになる怒りといらだちを、かろうじて抑える。発作的に感情を爆発させることがどれだけ非生産的かを、俺はこれまでの人生でたっぷり学ばされた。そろそろ、身をもって得た教訓を活かして生きるのも悪くないだろう。

深呼吸 そして、観察及び思考。

女に立ち去ろうという様子が全く見当たらない。そして、こいつは生半可なことでは追い払えそうもない。だったら、女が満足するまで話をして、適当なところで切り上げようという作戦に変更だ。

「……………母親はいない。顔も知らん」

決断し、会話をすることにした。できるだけ感情を殺したつもりだったが、声のとげとげしくなっているのが自分でも分かる。

「じゃあ、パパは？」

「いるにはいたが、ろくなことを教わってない」

実の父、七夜黄理が俺に教えたのは、殺しの技術だけだ。育ての父、遠野槇久が俺に教えたのは、憎しみだけだ。そしてもう一人の男 俺に全てを与え、俺の全てを奪った男は、今向こうでプラグを点検するのに忙しい。

「そうなんだ……………」

俺の“家庭の事情”を知って、女はちょっとばつの悪そうな顔をした。その眼の中に憐憫の色がはっきりと見える。どうやら、本気で同情しているらしい。

俺は大きく舌打ちした。

何てこった、みなしご遠野志貴は同情されているぞ。それもこの馬鹿に！

そして女は、加速度的に不機嫌になっていく俺の神経を、さらに逆なでするような行為に出た。

あろうことか、俺の頬にそっと、てのひらをあて、ぞっとするくらい優しい声で、こうささやいたのだ。

「大丈夫、志貴。あたしがいるよ……………だから大丈夫」

もう勘弁してくれ。

何の因果で、出会ったばかりの女 しかも底なしに馬鹿で、この上なくこちらを不快にさせる女に、哀れまれ、こんなわけの分からないことを言われなきゃならない？

この時点で、敗北主義者を自認してるらしい我が理性は、早くも白旗を上げた。

頬にふれていた女の手を、力まかせに払いのけた。そして、目の前に立っている女を乱暴に突きのけて、自分のマセラッティに向かう。

そのまま、乗車して帰るつもりだった。そうすりゃ女も自分の車を動かせるだろうし、俺

もこいつとこれ以上顔をあわせなくてすむ。ここで激情を抑制しながら、この女と話していたって、いいことなんか一つもない。

「待って、待って！」

あわてて、女が追いかけてきた。前に回りこみ、キーを取り出してドアを開けようとしていた俺と、車の間に立ちふさがるかっこうになる。

「志貴、どうしたのよ？」

俺がおかんむりなのに毛ほども気づいた様子はなく、女はげんそうだった。

「……どけ。俺は帰るんだ」

「どうして？ もっとお話ししようよ」

「俺はしたくねえ」

「あたしはしたいの！」

子供じみた押し問答。果てがなく……無意味だ。俺の人生には、そうじゃないことの方が少ないが。

言葉で納得する相手じゃない。そう考え、今度は肩で女の胸のあたりを突いた。骨も折れよとばかりに勢いよく　　だが実際に俺の肩口にぶつかったのは、胸骨ではなく、柔らかで弾力に富んだ部分だった。

小さな悲鳴とともに女はふっとばされ、尻もちをつく。俺はそれで少し溜飲を下げた。

「志貴のばか！ エッチ！ もう怒ったよ！」

スカートの中身が丸見えなのにもおかまいなしに、地べたに座り込んだまま、女はわめきちらした。意に介さず、車のドアに向きなおり、鍵を開けようとした。

その瞬間、女が信じられないほど機敏かつ、滑らかな動きで立ち上がるや、俺の手からキーをひったくった。そして、豊満すぎる肉体をゆすりながら、脱兎のごとく逃げていくジョゼッペの方へ。

「くやしかったらここまでおいで！」

ジョゼッペの背後に隠れ、あかんべえをしながら、女がはやした。高くさしあげた右手の中に、きらきら輝くマセラッティのキー。

ぶっ倒れそうだ。

俺が相手にしているこいつは、一体何者だ？ 発育のよすぎる、ただのガキか。拘束を逃れた狂人か。はたまた新手の吸血種、執<sup>イン</sup>行<sup>フェ</sup>者・遠野志貴抹殺のために送られてきた最強の刺客か。ああ畜生、あんな鈍重そうな、脂肪と官能の塊みたいな身体をしてやがるくせに、何であんなに素早く動けるんだ。それにしてもジョゼッペの野郎、今もすました顔だが、実はあいつがやらせてるんじゃないのか？ いやそもそも俺は何でこんな所でこんなことを

許容量をはるかに越えた憤怒と困惑で、脳みそが沸騰している。思考が錯綜し、ばらばらな、被害妄想と強迫観念の出来そこないが、頭の中で浮かんでは消えていく。

思いきり頭を振った。冷静になれ。冷静になれ。口の中で呪文のように繰り返す。

いつものようにやるんだ、志貴。いつものように天をあおいで、深呼吸をして、自分を取り戻せ

「ヘイ、雌犬<sup>ヒツメ</sup>。とっととそいつを返しな。俺が本気になる前にな」

悪魔も逃げ出しそんな呪詛を吐き散らしたいのをこらえ、町のチンピラじみた軽い調子で声をかけた。努力のかいなく、目に見えるほど明確な殺気が声にこもる。

「やだ。ちゃんと、“キヤル”って呼んでくれないと返さないもん」

俺の憤怒が、また暴発の危機をむかえた。歯ぎしりしてこらえる。力が入りすぎて、奥歯が欠ける嫌な音がした。

作戦変更 実力行使に。未だジョゼッペの背に隠れている女に、ずかずか歩み寄る。

「ジョゼフ！ 助けて、志貴がいじめるよ！」

やたら楽しげに、きゃあきゃあ騒ぎながら、女はジョゼッペの両肩をつかんで、その身体を盾にするように俺に向けた。この期に及んでまだ無表情な(ある意味、超人的な自制心だ)奴の顔が、俺の眼前に突き出されるかっこうになる。

「……機関員の質が落ちてるぜ、ジョゼッペ。しつけがなってないな」

「仕方あるまい。私はしつけが下手だ……お前に関しても失敗したことだしな」

そこで言葉を切り、(信じがたいことに)ジョゼッペは不器用にウィンクした 俺の知る限り、この世で最も珍妙で、おぞましい茶目っ気だった。

「まあなんだ……仲良くしておけ」

俺の理性は敵前逃亡した。ジョゼッペの胸倉をつかみあげ、横手に放り投げる。奴が見事なバランスで着地するのを確認するのももどかしく、女も捕まえようと試みたが、するりとかわされる。

女は俺から跳び離れると、思わず見惚れてしまうほど優美かつ、アクロバティックな動きで宙を舞い 俺のマセラッティのルーフに着地した。べこん、という悪夢のような音が響きわたる。

論理的考察 明日はきっと板金屋がもうかる。

女はマセラッティの上で仁王立ちになり、けらけら笑う。真下にいる俺は、またもスカートの中を見せられる 夕陽の中でもまぶしい、コバルトブルーのストライプ。

「ほらほら志貴！ 早く降参しないと、いつまでたってもおうちに帰れないよ！」

丸見えなのを知ってか知らずか、女は得意の絶頂だった。

再度作戦変更 観念した、といわんばかりの苦笑いととも肩をすくめ、オスカーものの演技力で優しい声を出すことに成功する。

「オーケー、分かったよ。キヤル、スウィーティー、お願いだから志貴おじさん<sup>マシタカ</sup>にそれを返しておくれ。いい子だから！」

わざとらしいのを通り越して、大馬鹿の域に達しているセリフだが、この際、体裁は気にしてられない。

そして、女は俺を越えた大馬鹿だった。その言葉に気をよくしたのか、にっこり笑ってマ

セラッティの上から飛び降りる。その際、またルーフが破滅的な音を立てたが、鋼鉄の意志で笑顔は絶やさない。

「はい志貴。じゃあ返してあげる。意地悪してごめんね」

女はてのひらにキーをのせて、俺にさし出す。俺が今何を企んでいるか、ちっとも分かっているふうのない笑み　数分前に会ったばかりの俺に、全幅の信頼をよせているような笑み。

狙っていたのはこの瞬間だった。キーをさし出す女の腕をつかみ、あいた手で女をぶん殴る。全身全霊の力で、きれいな顔が修復不可能になるまで殴りまくる　それが、俺の立てた作戦だった。子供だまし……否、子供にだって通用しない、ちんけな策略。

だが、この女は引かかった。あとは腕をつかんで引きよせ、こころゆくまで顔面を殴り潰してやればいい。あの娼婦のように。

あの

赤い瞳の

娼婦の

そこで動きが止まった。女の顔面を破壊するための動きを、両腕が拒否していた。

赤い瞳　刹那よぎったそのイメージが、俺の憤怒と破壊意志を完全にぬぐい去った。

「……どうしたの、志貴？」

女の声。痴呆のように口を半開きにして立ち尽くしていた俺は、それで我に返る。さし出されたてのひらから、キーを奪い返す。

「消え失せろ」

やっとのことと言えたのは、それだけだった。女はまた、にんまり笑う。

「今日はこんなところかな。志貴、ちゃんとあたしの名前、呼んでくれたしね」

女はくるりと背を向けた。スキップしながら、自分のシトロエンに向かう。そして乗り込んでエンジンをかけた。同時に、車体が不気味な動きで持ち上がる　魔法のサスペンション、 hidroニューマチックの効果。こんなものを作り、道路を走らせようなんて考えるフランス人は、やはり世界最低のくそったれだ。

「志貴、いいこと教えてあげる」

サイドウィンドウから顔を出し、女は言った。

俺は応じなかった。“いいこと”が、愛車の故障自慢ではないことを祈っただけだ。シトロエンに乗るような変態は、とかくそういうことを好みがちである。

「志貴は、今日からどんどんあたしのことが好きになるよ。あたしが志貴のことを好きなのと同じぐらいに、あたしを好きになる」

めちゃくちゃな予言　前言撤回だ。頼む、愛車の故障自慢にかえてくれ。 hidroニューマチックが、電子制御化されたハイドラクティブ　に進化してから、どういうトラブルが出るようになったのか、それを教えてくれ。

「これは運命なんだよ……だって、あたしは志貴のために生まれてきたんだから！」

言うなり、女は勢いよくシトロエンをバックさせた。リアを思い切り俺のマセラッティの鼻っ面に叩きつけ、後方に一メートルほど押し出す。そうやって切り返すためのスペースをつくると、俺に怒鳴る隙も与えずに、その場から走り去った。

あとに取り残されたのは、俺とジョゼッペ　そして、見るも無残な状態になった俺の愛車。

「ジョゼッペ」

修理を終えたのか、何事もなかったようにVWゴルフのボンネットを閉じていた奴に、声をかける。

「修理費用なら経費で落としてやる」

「そうじゃねえ」

手ぶりとともに奴の言葉を否定する。完全にへしつぶれている三又鉾のエンブレムに目をやりながら。無論、修理費は払ってもらう　慰謝料も欲しいくらいだ。

だが、今重要なのはそんなことじゃない。

「まさか、この先の任務で、俺とあいつを組ませるつもりじゃあるまいな？」

ジョゼッペは答えなかった。“帰れソレントへ”を鼻歌でやりつつ、工具箱を後部トランクにしまう　ごまかしというにはあまりにわざとらしい。この様子では、おそらく俺の希望はかなえられそうもない。近い将来、俺はあの女と組むことになるだろう。

「ジョゼッペ」

「だから何だ」

「あんた、楽しんでやがるだろ、絶対」

ジョゼッペは、ひょいと肩をすくめた。

「人生はみなお笑い草だ」

きいたふうなセリフ。俺は奴の足元に唾を吐き捨て、背をひるがえした。

「どいつもこいつもくたばっちまえ」

虚しい、誰にも届かない呪詛。ジョゼッペは聞いてもいないようだ。

どいつもこいつもくたばっちまえ。もう一回、今度は腹の中でつぶやきながら、車に乗り込んだ。

フロント部分の惨状にもかかわらず、エンジンは何とかかかり、俺は無事、家路につくことができた。

## 5

記憶にある限り、秋葉は俺の前で涙を流したことはないはずだ。

だが、毎夜こうして向かい合う秋葉は、いつも泣いている。泣きながら、俺をなじる。

兄さん、どうして？

ひたすら泣きながら、秋葉はそればかりを繰り返す。

どうして？ それは俺が訊きたい。

どうしてこうなったのか、どうして俺はここにいるのか、どうして俺は俺なのか、それを訊きたい  
秋葉が答えてくれるはずもないが。

ことに、今ここで、俺の目の前にいる秋葉は。

同様にして、俺も秋葉の問いには答えられない。秋葉の問う“どうして”には、今もって俺自身、答えを得られないからだ。たぶん、永遠に得ることはないだろう。

どうして、秋葉のいるあの屋敷に背を向け、この血塗られた道を往くことに決めたのか  
今でも、それははっきりとした言葉で説明することはできない。

分かっていることといえば、その時はそうするしかないと思い、そして今もそう思っている、ただそれだけだ。

だからその時も、俺は秋葉に説明はしなかった。一方的に別離を宣言し 棄てた。

ジョゼッペと出会ったあの日、俺は帰るなり、秋葉に屋敷を去る旨を告げた。イタリアに留学するという理由 その場で考えたでっちあげもそえて。

当然、秋葉は猛反対した。当然の話だ。八年ぶりに屋敷に帰ってきたかと思えば、また出て行くというのだから。反対しただけでなく、秋葉は俺を詰問し、叱責し、痛罵した。

それに対しては特に何も感じなかった。全て、予測済みの反応だ。怒ったり、傷ついたりするようなことじゃない。

ただ、その時、俺は 渴きをおぼえていた。怒りで頬を紅潮させ、殺意すらまじった、ぞくぞくするような視線を浴びせる秋葉に、俺は渴きをおぼえていた。

そうだ、渴きだ 秋葉の言葉は耳に届くことはなく、俺はただ、昂ぶっていく自分の欲望だけを感じていたのだ。

今ナイフを抜き、心臓を貫いたら、秋葉はどんな顔をするんだろうか？ どんな悲鳴をあげるんだろうか？ どんな目で俺を見るんだろうか？ 腹を裂いたら、どんな色のはらわたが見えるんだろうか？ そして、そのはらわたを引きずりだして、口にしたらどんな味が

気づくと、秋葉は沈黙していた。俺を見つめる、大きく見開かれた目 そこには、見誤ろうはずもない、一つの明確な感情だけがあった。

恐怖。

もはや、秋葉の目には、俺が血のつながりのある（いや、実際にはなかったんだが）兄とは映っていなかった。

秋葉は俺を、単なる、危険な、排除すべき 自らの捕食者と見ていたのだ。

黒い瞳の中に、恐怖だけでなく殺意が宿った。髪の色が変わっていく 俺が愛した、あの色に。

やっぱり秋葉は俺の妹だ。普通の少女のように、ただ怯えるばかりではなかった 俺

の欲望は、そこで最高潮に達した。

制止があと一秒遅ければ、俺は秋葉をこまぎれに変えていただろう。事実その時、俺はポケットのナイフを手にしていたのだ。

『秋葉さま。志貴さんを気持ちよく行かせてあげましょう。……男の子が、一度決めたことですから』

恐ろしく場違いな言葉とともに、俺達の対峙を制止したのは琥珀だった。あの欺瞞的な笑みとともに、絶妙のタイミングで俺達二人の間に割って入ったのだ。

一瞬、それに氣勢をそがれたものの、秋葉の殺意は衰えていなかった。割って入った琥珀を一喝して退けようと、その口が開きかけ　　そこで止まった。

琥珀はただ、笑っていた。なんとも言いがたい笑顔を、秋葉に向けていただけだ。

だが俺は見た。笑う琥珀の瞳には、名状しがたいほどに昏いもの　　その日、俺があの灰緑色の瞳の中に見たのと、同じものがよどんでいた。

それを見て、今度こそ本物の恐怖にとらわれたのか、一瞬で元の黒髪に戻った秋葉は、あとじさり　　そして(プライドの最後のかけらを費やして)大きく鼻を鳴らし、背を向けた。

床を踏み鳴らして自室に去る秋葉を尻目に、琥珀は俺に向き直り、言った。

『もう我慢できませんか?』

琥珀は全て気づいていたのだ。

依然として目の前にある、あの笑顔　　瞳の中のあの暗黒。

殺意が一瞬で萎縮した。俺は黙ってうなづく。そうですか、と笑って、琥珀もまた自室に去っていった。

それが、生きている二人を見た最後だった。

数年後、ヴァチカンに届いた翡翠からの手紙で、俺は二人が死んだことを知った。死の理由は一切書いていなかった。ただ、遺産等の事務処理に必要な書類がいくつか、同封されていただけだ。

俺も、どうしてと翡翠に問うことはせず、書類と手紙をくずかごに放り込んだ。

兄さんはいつも自分勝手なのよ。自分のことばかりで、私のことなんか……

未だ愚痴り続ける秋葉に手を振り、追い払った。目の前の、秋葉が消える。

やっぱり秋葉はだめだ。蓄積がないぶん、断片的だ。

秋葉が消え、俺は独りになった。

戻ってくる、現実の世界　　一切の電灯を消した、夜のホテルの自室。

時刻は零時近い。スイートを満たす、漆黒の闇。独りで考えるにはこれに限る。

暗闇の中で、卓上に置かれたソプラニの箱とライターをたぐりよせ、一本取って火をつけ

た。

あの、屋敷での最後の夜（翌日早々、俺は家をおಂಡた）は二つの大事な教訓を俺に与えてくれた。

ひとつ。琥珀は人間だった。

この世で唯一、魔と呼ばれる者達より性質の悪い、人間と呼ばれる生物だったのだ。あの時、ヒトならざる秋葉を恐怖させたのは、琥珀の人間の部分に他ならない。

ふたつ。俺は秋葉に欲望を……殺意を感じた。身を引き裂き、魂を断ち、その肉を喰らいたいと、心底から願ったのだ。

つまり俺にとって、血縁とかなんとかは、殺戮欲の前菜にすらならないというわけだ。そして何より、たぐれる限りの自らの記憶を客観的にみる限り、再会してからこのかた、俺は一度たりとも正常な意味での愛情を、秋葉に対して持つてはいなかった。秋葉は俺にとって、徹頭徹尾“獲物”にすぎなかったのだ。そして、秋葉もそれを知りながら、あえて気づこうとはしなかった。

十年前にあの屋敷で過ごした日々。互いが何者か分かっていながら、それを無視して営んでいた、無邪気なおままごと。

身勝手な美化をくわえられた過去も、冷徹な事実によってそのヴェールを引き剥がされたあとには、腐臭に満ちた真実だけが残る。

過去だけしかない俺が、最も恐れているのは、その現象だ。

秋葉に対して殺意をいただいたことには、何ら感慨はない。俺が、元からそういう生き物だっただけの話だ。

だがその事実によってあの日々が引き裂かれることはとても恐ろしい。

現実にどうあろうと、俺は秋葉の良き兄でいたかった。記憶の中では。

現実にどうあろうと、秋葉は俺を愛してほしかった。記憶の中では。

身勝手な妄想にすぎないことは百も承知だ。だが夢ぐらい、自分に都合のいいものを見てもいいんじゃないか？

もっとも、それを許そうとしないのは、現実を知る、他ならぬ俺自身なのだが。

またいつもの煩悶か、同胞よ。

脳裏に響いた“声”に、思考を中断して顔をあげた。

暗闇の中で。いつものように。ネロが立ち、こちらを凝視している。

『……何度言ったら分かる。俺を同胞と呼ぶな。勝手にお前の仲間にするなよ』

苦笑いとともに、ネロにそう“答えた”。

ならば私も幾度なりとも言おう。我が血肉は姫の手によりお前の中に在る。我が精神は“蛇”の手によりお前の中に在る。これを同胞と呼ばずして何と呼ぶ。

『ただの寄生虫さ』

あいさつ代わりに、いつものやりとり。それに満足したのか、ネロは俺の前の椅子に座る。そして身じろぎもせずに考えたあと、口を開いた。

虚か実か、その差異に論ずることに時を費やすなど無意味。お前の中の世界では、お前の脳内に在りしもののみが真実。他の者も同様。お前が現実と呼んでいるものは、自他の世界が重なり合う、僅少な部位に過ぎぬ。

『空論だな。俺はお前を叩き殺した。今のお前はただの残りかすだ。……その事実はどうなんだ、ネロ先生よ？』

十年の間、語りに語り尽くしたにも関わらず、未だネロは分かっていなかった。

俺の人生は、幻想と現実の境界線を行ったり来たりのくり返しで、しかもそれは、常に相互干渉しあっている。過去の幻想はところかまわず現実を侵食し、すさみきった現実はいつだって幻想を汚す。

意識して、現実と夢想の峻別を行わないと、俺は生きていくことすらできない。

変わらぬ。かたちは違えど、私は今なお在る。元より我が肉体は“在った”とは言いがたい。我が内なる混沌の消滅は、単なる過程だ。

『そんなことはメルロ・ポンティとでも話してくれ。残りかすのお前は、理屈こねてるだけでもいいだろうさ。だが俺は生身なんだ。こじつけでもなんでも、虚実の差異ってやつをつげんと、息ひとつできやしねえ』

矛盾だ、同胞。虚実の差異をわきまえようとしながら、実のところではそれを混一せしめている。言行がつりあわぬこと甚だしい。

『そんなことは分かってる。……だから、十年もこうして考えているんだ』

ネロは全く表情を変えないままうなずいた。そして、俺を言い負かすためにここにいるわけではないことを思い出したのか、調子を変えた。

ひとつ話をしよう、同胞よ。私が見た、ある男の話だ。

ネ口の記憶から、“ある男”のイメージが流れ込んできた。まだはっきりとした形をとらず、漠然としているうちから、俺にはそれが誰だか分かった 奴だ。

その男は、私を斃さんとした無数の者達の一人だった……他の者達同様、それを適えるだけの力を持ち合わせてはいなかった。必然、敗れ私に喰らわれようとした、その時……男は笑った。

流入してくるイメージが確たる形をとりはじめた。予想通りの顔貌 さすがに、今よりはいささか若いが。

笑ったのだ。明白な死を見ながら、その男は笑っていた。その貌<sup>なま</sup>には恍惚さえあった。……知らず、私は訊いていた。今しも儚くなるうという時に、何ゆえに笑うのかと。

ネ口の言葉を待つまでもなく、俺の脳裏には悪夢じみた奴の笑みがいっぱいひろがる。生一本の狂気の他は何もない、その醜悪な笑顔は、絶対の真理に到達したかのごとき至福に満ちていた。

見えそうだとだけ、男は言った。何が見えようとしていたのか、男が何を見ることを求めているのか、今もって解らぬ。

そこでネ口は言葉を切った。視線を下に落とし、考え込む姿勢をとる。

『……それで、殺さなかったのか？』

然り。その男が死の中に、あるいは死をも超越した世界において何を見出そうとしたのか……その懸念が私をとどめさせたのだ、同胞よ。

『思うんだがな、お前は単にびびっただけじゃないのか？ 男……あの野郎の笑う顔を見て』

からかう調子で言ったが、いつものごとく、ネ口は眉ひとつ動かさない。

かもしれぬ。知能ある全ての存在は“未知”を畏<sup>おそ</sup>れる。それは生命が脅威にさら

された際の動物的な恐怖とは異なる……より根源的な、己と己の知る全世界の存在に関わる恐怖だ。その意味で言えば、私はあの男を畏れた。

俺はあいまいにうなずいた。解るような、解らないような……ひどくもやもやしたものが、胸中にわだかまっている。

十年、お前とともにあの男を見、そして語りもした。なれど未だ、何一つとして解らぬ。見れば見るほど、語れば語るほどおぼろになっていく感すらおぼえる。

うつむきながら、かみしめるように、一言一言を語るネロ。俺は身を乗り出し、彼に顔を近づけてささやいた。

『思うんだけどよ』

ネロが顔をあげた。

『何が見えそうだったのか                      結局、あいつ自身がそれを、今でもはっきり解ってないんじゃないかねえか？』

ネロはまっすぐ俺を見た。何かの答えを、己の救済を、全ての終わりを求めているかのとき、真摯な視線。

目の前にある、黒々とした、深い闇を宿す瞳                      だが、ひどく澄んでいる。

それもまた正しいかもしれぬ。

ぼつりと、それだけを口にした。

そして立ち上がると、俺に背を向け、暗闇に向けて歩き出し……途中で、何かを思い出したように立ち止まり、振り返らぬままつけくわえた。

同胞よ、我らに出来るのは問い続けることのみ。答えを得ることなく、ただ問い続け、終わりを待つのだ……。

ありもしなかった希望の死。

ネロの背中が、音もなく闇の中に溶けていった。

耳鳴り                      戻ってくる現実の世界。気づくと、手にした煙草が根元まで燃え尽き、指を焼いていた。舌打ちしてもみつぶす。熱と、フィルターの焦げる悪臭はまぎれもなく現実の

ものだった。

……断っておくが、俺は気が狂ったわけじゃない。現実と幻想の区別は（生活が可能なレベルで）ついている。

だからちゃんと分かっている。ネロは俺自身が殺し、完全に消滅させた。十年経った今、ローマにわざわざ俺を訪ねてくることなんかありえない。

だから、先程俺と“会話”していたネロは、無論現実の存在ではない……かといって純然たる俺の妄想の産物というわけでもない。

俺の中の“ネロ”は、彼を構成する全てを熟知したロアの記憶をもとに構築されたものだ。だから、きわめて実物に近い いや、ネロ本人が知っていた以上にネロらしいと言えるだろう。

この十年、ほとんど毎日のように、夜には“ネロ”とこうして話している。ネロばかりでなく、俺の脳内にあるロアの記憶に深く刻まれた者達 ロア本人、そしてシキとも。

夜が来るたびにこうして、彼らを記憶のうちより呼び出し、ともに語り、考え、議論し、時には思い出話にふけているのだ。

毎夜繰り返される、死者達との会話。夢の中で生きる俺の、無為な独り遊び。そして、それによって崩壊寸前の現実感覚を維持している。

夢想によって補完される現実世界      なんとも救いがたい。

そのへんにしておきたまえ。思索の行き着く果ては、全ての否定と惨めな自己憐憫でしかないよ。

次のお客さんだ。

整った顔立ちに、どこか下卑た笑みを浮かべながら、ロアが立っていた。

『何百年も“永遠”をこねくりまわしていたお前に言われたかねえ』

だから言えるのさ。私は誰よりもその愚かしさを知っているんだから。

『違うない』

それを聞き、ロアはにっこり笑って俺の前の椅子に座した。

ネロの話でいよいよ、君の悩みは増えたみたいだね。

『まあ、いつものこったけどな』

悪く思わないでほしい。彼は彼なりに君のためになろうとしているんだ。……  
多少、理論に偏りすぎるきらいはあるが。

『言いたい放題言って、答えも出さずに行っちまうお前よりは誠意があるよ、ネロは』

仕方あるまい。ネロの言う通り、どんな物事にも“答え”なんてものは無いし  
……仮にあったところで、何の意味がある？

『なぐさめぐらいにはなるさ』

いいかげん分かりそうなものだが。どうあがこうと、無いものは無いんだ。

顔の片側だけ吊り上げた、意地の悪い笑みを浮かべるロアに、肩をすくめてみせる。  
理論家肌のネロに対して、意外やロアは現実主義者 いや、虚無主義者とってよか  
った。幾多の肉体と時空を経てまでおこなった、八百年にわたる研究と思索が、結局のところ  
壮大な自慰行為にすぎなかったことに気づいてしまった反動かもしれない。

ネロと君の話を聞くたびに、私はいつも、ある愚かな男のことを思い出さずには  
いられないよ。

『今日はそんな話ばかりだな。……まさか、お前もあの野郎の話をしに来たのか？』

ロアはそこで、くすくす笑った。いついかなる時でも、奴 ジョゼッペのことを意識  
せずにはいられない俺を、揶揄するように。

違うよ。あの<sup>オセロフ</sup>黒人のことさ。……覚えているだろう？ あの、愚かで  
ても美しい男のことは。

俺はうなずいた。忘れるはずもない もっとも、その男はお世辞にも“美しい”とい  
えるようなご面相じゃなかったが。

ロアが言っているのは、ジョゼッペが探してきた埋葬機関の殺し屋の一人である、ハイチ  
人のことだ。

名前は覚えていない。というより、知らない。恐ろしくややこしいクレオール語の通り名  
を名乗っていたので、最後までみんな覚えられなかったのだ。

仕方なく、俺は（我が脳内のロアの発案により）シェイクスピア史劇になぞらえ、勝手に“オセロウ”と呼んでいた。

“オセロウ”はもともと、<sup>デュバリエ二世</sup>からアリストイド政権の頃まで、<sup>ハイチ</sup>秘密警察の殺し屋をつとめたガンマン　そして、二十世紀最強最後と賞賛されるほどの魔力を持った、<sup>ヴードゥー</sup>の黒魔術師だった。

91年のクーデターの時にフランスに逃亡したところで、ジョゼッペに拾われ、その時をさかいに、人殺しから化物殺しに宗旨がえした。

とにかく、おかしい男だった。手足が恐ろしく長く、二メートルを超える長身。そして、骸骨のようにやせぎす。小さな顔には、ずさんな手術を受けたとおぼしき痕跡（出生時に口蓋裂だったらしい）がいっぱいに走っていた。

しかし、死徒そこのけの怪異な容貌以上に辟易したのが、（基本的には無口なのだが）突然、取りつかれたように何時間も話し続ける悪癖だ。

不幸にして“オセロウ”に選ばれた聞き手（何故か俺になることが多かった）は、<sup>聖霊</sup>の恐ろしさ、キリストの使徒達の偉業、果てはCIAの<sup>工作担当官</sup>のろくでなしぶりまで、とりとめのない話をえんえん聞かされるはめに陥った　それだけ話しても、（ハイチ人によくいるらしいが）敬虔なカソリック信者にしてヴードゥー使い、という矛盾の説明はなかったが。

とはいえ、魔狩人としては最高ランクの男であったことは間違いない。法王庁に対しては比較的従順なジョゼッペが、わざわざ彼らの反対を押し切って埋葬機関に引き入れたことから、それは分かる。

当時、ヴードゥーなんかを信仰している人間を雇うことに、法王庁は難色をしめしたが、ジョゼッペが「同じ<sup>マハウエ</sup>神を信仰する宗教だから」とむちゃくちゃな理屈を振り回して強引に認めさせた、というすごい話が伝わっている。たぶん、同じ論法でユダヤ神秘主義<sup>カバラ</sup>やらスーフィズムの連中とつきあっていたに違いない。

そして、どういうわけか、“オセロウ”は俺の補助役をつとめることになった。

最初は変人ぶりに閉口したものの、その実力が分かってくるにつれ、俺達はいいいコンビになっていった。

あの黒人が、両手にかかえたトンプソン短機関銃をぶっぱなしながら、声高に呪文を唱え、とてつもない魔力によって俺を護り、雑魚どもを粉碎し、親玉の死徒の防御を打ち砕いて丸裸にするのは実に壮観で　頼もしいことこの上なかった。俺はただ、死徒の“点”を突くことだけに集中していればよかった。

“オセロウ”の存在なしに、あの二十七祖との戦いは勝ち抜けなかつただろう。

だが、それも彼の死とともに終わった。

二十七祖の一人　確か“黒の姫”とかなんとか（くそ、名前が思い出せない）呼ばれていた吸血種を始末しにいった時だった。

実行の日の前日、俺と“オセロウ”は膝をつきあわせるかっこうで、偵察部隊の連中が撮

ってきた標的の写真(当然、埋葬機関謹製の特殊カメラで撮影したものだ)をながめていた。

やたら鮮明な写真を見ながら、その吸血種の容貌が、思い出したくないあいつに、妙に似ていることにいらだっていた俺に、“オセロウ”は言った。

『執行者。おそらく、明日でお別れだ』

全くの無表情で、そんなことをぼつりつつぶやいたのだ。

俺は意にも介さなかった。いつものたわごとだと思い、返事代わりに、何で鏡に映らない吸血鬼を写真撮影できるのかな?などと問の抜けた質問をしただけだった。

翌日、その言葉の意味がようやく判明した。すでに手遅れだったが。

標的 あの吸血種、黒い女を目の前にした“オセロウ”は、呪文も唱えず、銃を手に取りることさえしなかった。

ただ、無防備に ふらふらと、女に近づいていっただけだった。

そして、手の届くほどの距離まで近づいたところで、聞き取れないほどの小声で、女に向け二、三言、何事か語りかけた。

しばらくあっけにとられていた様子の黒い女は、“オセロウ”の言葉を笑い飛ばし、次の瞬間にその五体を引き裂いた。

馬鹿みたいにあっさりと、“オセロウ”は死んだ。

そして、全身を返り血で染め、ぞっとするほど美しい笑みを浮かべた黒い女が、“オセロウ”の屍を踏み越えて、俺に向け歩いてきた。その時。

突然、黒い女が苦悶を始めた。両手で顔をおおい、獣じみたうめきをあげながら、その場でのたうちまわった。

目をこらして見てみると、女は腐っていた。

正確にいうと、血 “オセロウ”の血を浴びた部分が、白煙をあげ、すごい勢いで茶色く朽ちていったのだ。

美しかった女の顔が、一瞬にしてミイラ同然になり、やがて朽木のように崩れ、最後には全身が一山の塵芥と化して消えた。己の生命と血の全てを賭けた“オセロウ”の最後の呪詛。

“オセロウ”が死に、最後の二十七祖(消息不明な者は無視して、だ)だった黒い女が死んだその夜、俺は鎮魂の杯を傾け、“オセロウ”をいたくお気に入りだった口アとともに、あの愚かな黒人の死を悼んだ。

あとで口アから聞いたところ、泥酔した俺は「吸血種を呪い殺すなんて、何と非常識な野郎だ」と、壊れたレコードのようくりかえしていたそうだ。

君らじゃないが、あの“オセロウ”の行動の意味については、私なりにずっと考えてきたんだ。

『それで？ 本邦初、ロア先生の“答え”ってやつを聞かせてくれよ』

あくまで推論だがね。……思うに、あの黒人は、アルトルージュを求めていたんじゃないかな。その想いを当人に告げたけど、拒まれてしまい……殺した。

『そんな名前だったか、あの女？』

そうだよ。君の物忘れも、だんだんひどくなってきたな。

『脳細胞がぼろぼろ崩れ落ちてるんだ、仕方ねえだろ。……それにしてもひでえおちだな、ロア。そりゃ“オセロウ”の野郎はとち狂ってたが、惚れたはれたで仕事を放り出すような低能じゃなかったぜ』

そんな世俗的なニュアンスで言ったんじゃないよ。君なら理解できるんじゃないのか？

いつになく、ロアは真剣な顔だった。突き刺さる、敵意すら感じられる鋭い視線。

『……何をだよ』

彼は死徒の姫君の中に見てしまったのさ。土にまみれた宗教なんかに淫していはとても到達できない崇高さ、現世の事象に盲いている眼には決してとらえることのできない無垢なるものを。

その言わんとすることを理解した瞬間、俺は立ち上がっていた。触れることのできない、目の前の“ロア”を殴りつけようと拳を固めていた。

ロアは無言で首を振った。

志貴。君はもう気づかないといけない。“オセロウ”の死から学ばなくちゃいけない。人は求めた物を決して手に入れられないんだ。そして手に入れられない時には……

「黙れ！」

俺は叫んでいた。いつものように心の中で語りかけるのではなく、肉声で。喉も張り裂けんばかりの大喝に、部屋中の壁がびりびり震えた。

しばし、沈黙が室内を支配した。

すまない。

小さく、ロアが謝罪した。そして、決まり悪そうに身体を起こす。

『いや、悪かったよ』

冷静さを取り戻し、再び座るよううながしたが、ロアは静かに首を振った。

本当にこのことは考えてほしいんだ。“オセロウ”だけでなく……我々が同じものを求め、同じように手に入れられずに彷徨している事実を。

俺は首を振り返した。いつも考えている　　考えずにはいられないからこそ、そのことから目をそらしていたい。

繰り返して言うが、やっぱり無いものは無いんだ。私同様、永きにわたってそれを求め続けるような愚行を、君にしてほしくない。

最後は泣き声に近い調子で言い、ロアは去っていった。

再び現実　　重く、全身にのしかかってくる音と闇。

空調すら稼働させていない部屋の、冷えた空気を肺に取り込む。叫んだおかげで、まだのどはひりひりしていた。

大きく、息を吐き出す。身体は重い倦怠感をおぼえていた。ロアの言葉は、心身ともに俺を打ちのめしたのだ。

煙草の横に置かれていたタンブラーを手にとった。からっぽだった。再度長嘆息して、瓶からタンカレーをなみなみとそそぐ。半分ほどを、一息に飲み干した。

灼けつくのどから、太い息を吐き出したところで、また“声”がした。

平気か、志貴？

顔を上げると、今度はシキがいた。口元だけはいつもの薄ら笑いのかたちを作りながら、心配げな様子でのぞきこんでいる。

俺は目を閉じた。手を振り、首を振った。

『悪い。今日はもう、お前と話す気分じゃなくなっちゃった』

シキは泣き笑いの顔でうなずいた。分かっている、というように。

でもさ、ひとつだけ言わせてくれよ、ひとつだけ。な？

場違いなくらいに明るく、シキは言う。こいつはいつもそうなのだ　　だが、単なる無神経とか、場の空気を察しないとか、そういうことではない。

俺が今、ロアの言葉の含む何物によって苦しみ、どういう気分にいるか、シキが一番よく分かっている。

そう、シキは分かっている。誰よりも、俺のことを理解している。それも、そんじょそこの相互理解とはわけが違う。

血縁こそなけれど、俺達は真の兄弟なのだ。暗がり生まれ、闇の中で生き、汚れた人生と命を分け合った　　魂の双子。互いが何を考え、何を望み、何に苦しんだかは、嫌になるほどよく分かっていた。

『…………手短かに頼む。今日はもう、酔いつぶれて寝ちまいたい』

無理に笑って、軽い調子で言った。シキの声を聞いて、少し気分が落ち着いてきたのは事実だが、いつもの馬鹿話につきあえる精神状態でもない。

シキは嬉しそうに、うんうんうなずいた。

じゃあ本当にひとつだけ。…………今日は警告に来たんだよ、警告。分かるだろ？

したり顔で、わざとらしく声をひそめるシキ。俺は乾いた笑いとともうなずいた。

最近とみにそうなのだが、シキの一挙一動が、何故かおかしくてたまらない　　そして俺は、それに救われている。

今日のあの女だけだな…………あいつには気をつけろよ、マジでさ。

あの女。もちろん、夕方に会ったキャルのことだ。俺は、思わず眉をひそめた。

そんな顔するなって。このシキ様を信じてだな、とにかく気をつけろ。いいな？

言葉の最後に、念を押すように、俺の顔にひとさし指を突きつけるシキ。

冗談めかした口調で、しゃべっている間は笑いをたやしていなかったが…………俺には分かった。

シキは、あの女に近づくのが危険だということを、真剣に伝えようとしている。

彼の心遣いを無にすまいと、はっきりうなずいた。

『そうする。何にせよ、やばい女なのは事実だしな。…………でも、何故だ？』

訊いたとたん、目の前いっぱい広がる、得意げな笑み　　畜生、こいつに理由を訊いたのが間違いだった。シキは“何故”と問えば問うほど、答えようとしなくなる悪癖がある。俺を困らせて遊ぶために。

そいつは教えてやれねえな。自分で考えないと、脳のしわがなくなっちまうぜ、兄弟。

けらけら笑い、シキはご満悦だった。

教えてやってもいいんだけどさあ、兄貴の俺としては、いつまでも志貴ちゃんをなぜなに坊やにしとくわけにもいかないしなあ。それに、教えたらまた悩んじゃうしなあ。

自らの顎に手をあて、芝居がかった調子で悩むふりをするシキ。無論、教える気は皆無だ  
案外、警告の理由を考えてなかったのかもしれない。

『いや、独りでゆっくり考えることにする。……あんまり、あの女のことは考えたくないんだけどな』

ため息ひとつつき、話を打ち切るようにそう言った。

シキはいやらしい声で、そうでもないだろ？などと言って俺を肘でつついたあと、いきなり真顔になった。

本当に気をつける。お前にとってあの女は危険すぎる。

厳肅ともいえる声。今度は、何故とは訊かなかった。

いつものおふざけでなしに、絶対に答えられない理由がそこにあることが、俺には分かったのだ。

『分かったよ。また会うことは避けられそうもないが、そんな時やお前の言葉を思い出すことにするよ』

シキが破顔した。俺の肩を叩き（もちろん、実際には触れられっこないが）、世話が焼ける奴だよ、と言ってから、背を向けた。

本当にそのことだけを言いに来たらしい。早く帰るよううながした俺の方が、何だか物足

りなさをおぼえた。

それを察したのか、シキは振り返った。

あのさ、ロアのことなんだけど……あいつのこと、怒らないでやってほしいんだよ。

ちょっと、照れくさそうにつけくわえる。

俺が地下牢であの女におもちゃにされている間、ロアはずっと話しかけてくれたんだ。何でも教えてくれたし、励ましてもくれた。暗がりの中にいて、あいつの声が聞こえてくると、すごくほっとしたんだ。俺、あいつがいなかったら絶対におかしくなったた。

俺はうなずいた。

ロアの言葉に悩まされはしたものの、怒る気はない　　毎晩、こうして語りかけてくれるロアに、俺もまた救われているのだ。夜が来ればまた、俺はロアを呼ぶだろう。

そりゃあいつは、俺を乗っ取ろうとした吸血鬼さ。……でも、俺を助けてくれたのは、この世であいつつきりだったんだぜ？　少なくとも、いかれてるくせに善人づらしてたあの女より、ロアの方が百倍マトモだったよ。

俺は手を上げた。もう分かった、というふうに。

『最初から怒ってなんかいないよ。……また明日な』

言ってから気づいた　　そういえば俺達は、子供の頃はこんなことは言わなかった。いつも一緒にいたから、また明日、なんて言う必要もなかったのだ。

ああ、明日はもっとゆっくり話そうぜ、兄弟。

気取ったしぐさで片手を挙げ、シキも闇の中へ消えていく。

みたび、しじまが室内を支配する。それを乱すのは、窓の向こうからかすかに聞こえる、自動車の排気音ぐらい。

残った杯をあける。最後の一杯のつもりで、またタンブラーを満たした。へべれけというほどじゃないが、酔いはかなり回ってきている。

これを飲んだら、もう誰も呼び出さず、寝てしまおう　　そう決めたものの、いつだっ

て節制できたためしが無い。また、ぶつつぶれるまで呑み続けてしまうに違いない。

独り苦笑して、煙草に火をつけた。

まあいい。どうせ明日は何もすることがない。適当な時間に起きて、思いついたことをすればいいだけだ。

なげやりになりながら、紫煙をふかぶかと喫う。酔いがさらに回ってきた。

と、背後　このスイートの入口のところに、何かの気配を感じた。何のけもなしに、そちらを向く。

暗闇の中で、シエルが立っていた。

おやおや　俺は苦笑した。

ついに、シエルも死者の仲間入りか。生死のほどは結局分からなかったが、こうして夜に“訪ねて”きている以上、俺の中では死者として扱われることになったのか。

まあ、いい。現実には、シエルが生きているか死んでいるかなんてどうでもいい。

俺の夢の中で死者であり、こうして夜に話しにきてくれるなら歓迎だ。シエルもまた、ロアの記憶に深く刻まれた者であることだし、秋葉よりは楽しませてくれるだろう。

### 『シエル、やっと来てくれたな』

乾杯がわりに、手にしたタンブラーを持ち上げ、“シエル”に話しかけた。

反応はなかった。酒盃を持った右手を高くあげた、まぬけなかつこのままの俺を見て、“シエル”は不思議そうに小首をかしげた。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「お久しぶりですね」

俺は椅子から転げ落ちそうになった。

それは肉声だった。

俺の中の“ロア”や“ネロ”のように、心の中に語りかけてくるのではなく、鼓膜に響く、現実の声だ。

タンブラーが、手からすべり落ちた。残っていたジンが、じゅうたんの上にぶちまけられる。

「……………どうしました？」

シエルは首をかしげたままだった。表情は動いていない。どこか、壊れた人形のような観がある。

そして、部屋が真っ暗であることに今さら気づいたのか、電灯のスイッチを入れた。白い光の中で、はっきりとその姿が照らし出される。

本物の生身の生きているシエルだ。

俺は首を振った。信じられないことだが、それは事実だった。首を振り続けながら、床に落ちたタンブラーを拾い上げる。

「入っても、よろしいですか？」

抑揚のない声音。そこでやっと気づく。

シエルは、以前のように日本語ではなく、母国語　　いまましいフランス語で話していた。感情のこめられていない、冷えた口調とあいまって、記憶にあるのと同じ声にも関わらず、別人の印象を俺に与えた。

「……まあ、座れよ」

震える手でタンブラーをテーブルに置いたところで、ようやく声が出た。あまりの驚きのために、俺の声は老人みたいにしわがれていた。

シエルは小さくうなずき、足音高くスイートを横切って、俺の前の椅子に座した。俺との夜の会話に来た、“ロア”や“ネロ”と同様に。

あらためて、目の前のシエルを観察する。

彼女は変わり果てていた。

短く切っていた黒髪を肩のあたりまでのばし、トレードマークのあの眼鏡はしていない。どこか顔だちに残っていた幼さも、十年の歳月を経て完全に消え失せ、年齢相応に成熟した女の相貌になっている。

着ているものもカソックと編み上げ靴ではなく、身体に密着した黒いロングドレスと、ヒールの高いスエードのブーツ。あきれほど非実戦的　　まるで喪服だ。

体つきも、まるで変わっていた。

たくましかった肩回りの筋肉はすっかりなりをひそめ、か細くなっている。それに代わって、他の部分が女らしい丸みを帯びていた。胸はふた回り以上、もともとでかかった尻もさらに成長しており、ドレスは今にも破けそうだった。

変化したのは外観ばかりではない。

おそらく、ろくに鍛錬もしていなかったのだろう。先程の動きから推測する限り、体術も完全に錆びついているようだった。往年の、雷光のごとき身のこなしは見る影もない。

腐り果てた残骸。

どういう経緯のもと、こうなったかは想像がつく。

死ねる身体を求めて戦い続けてきたシエルは、その目的を遂げた時点　　あの日から、殺し屋たることをやめたのだ。結果、それまで戦うために絞りに絞り込んでいた肉体が、元の豊満な姿を取り戻した。

そして何より、止まっていた体内の時間が、ロアの消滅によって正常化したことが最大の要因だった。

長いあいだずっと、ロアとして覚醒した頃の少女のままだったシエルは、十年前にその呪縛から解き放たれて以降、普通の人間のように歳をとり、成長することとなったのだ。

シエルは生きていた。そして死んだ。

酔いが一瞬で冷めた。未だ震え続ける手で、煙草に火をつける。一喫いして、嘔吐しそうになった。

酔いとはまた違う悪質なむかつきが、俺の胸の中で渦巻いていた。唾液を飲み込んでこらえ、煙草をもみ消す。

十年ぶりの再会だというのに、俺の胸にわきあがったのは、吐き気にも似たものだけだった。あれほど逢いたいと逢って、あの日々のことを話したいと思っていたシエルが、いま目の前にいるというのに。

タンカレーの瓶を取り、直接飲んだ。味も酔いも感じなかった。吐き気も消えなかった。それを悟ってか、シエルは口元に薄い笑みを浮かべ、俺を見ていた。

「変わりましたね」

椅子の肘かけによりかかって頬杖をつきながら、シエルが言う。

いたずらっぽい視線 動作のひとつひとつが、どこかしどけない。俺の知っているシエルとは、やはり異質だった。

俺は息を吸い込み、空気ごと喉元まで来ていた嘔吐感を飲み下した。

「変わったんじゃない。元に戻ったんだ。……俺もお前もな」

シエルは艶然とした笑みを返す。だが、先をうながすつもりなのか、何も言わない。

「お前は知っていたはずだ。俺は自分が何者かを知らなかったし、お前は自分を偽っていた。あの時のあれは、その上でやっていたお芝居だろうが。十年経った今、俺は本来の化物殺しに戻ったし、お前はお前で元通り、嘘つきの殺し屋ってわけだ」

シエルの表情は変わらない。浮かべているのは娼婦の笑顔。俺の言葉を、楽しんでいるようにも見える。

「ごめんなさい。……まだ、怒ってます？」

言葉とは裏腹に、その声にはいかなる誠意も含まれてはいなかった。

「別に。……結局、あれはゲームだったんだ。俺はただの駒で、お前は指し手。どこの世界でもやっている、くだらんゲームだ」

シエルは眼を細め、くすくす笑った。今度は、あの日々を思わせる、屈託のない少女の顔 嘘つきシエルの仮面は変幻自在だ。

「そう言っていただけだと助かります。今のあなたを怒らせたなら、大変なことになりそうですから」

肉体は衰えきっているものの、眼までは腐っていないらしい。シエルは、きちんと彼我の実力差を見抜いていた 今のシエルなら、俺は五秒で殺せる。酒が入っていなければ、タイムはもっと縮まるだろう。

「……それで？ 今さら、何の用なんだ」

そっけなく、訊いた。さも興味がなさそうに、タンブラーにジンをそそぎながら。

俺は恐かった。シエルが発するであろう、あらゆる言葉が恐かった。シエルの語る現実が、俺の小さな夢想の世界を打ち砕いてしまうのが恐かった。

それでも、訊かずにはいられない こうして、シエルが目の前にいる以上。

「旧交を温めにきた、ではいけないか？」

俺の問いかけを、シエルはさらりと受け流した。相変わらず、すっとぼけた売女だ。

「それなら、十年前に来りゃよかったんだ」

「そもいきません。……あのことから数年は、私、とても忙しかったんですから」

「……何をしてやがった」

「ご想像におまかせします」

肩をそびやかし、のらりくらりと俺の質問をかわすシエル。彼女の意図をくんで質問をやめるほど、俺は紳士的じゃない。

「菓子作りでもしてたってのか。……それとも、お前のことだ。また化物殺しに舞い戻ったか」

ため息をつくシエル。しつこい男に辟易している、という演技としては上出来だ　　わざとらしさはぬぐいきれないが。

「平和的な仕事ですよ。……各方面の調整業務、といったところですかね？」

見え見えの煙幕。

そこで、ひらめくものがあつた。数年来の疑問　　ばらけていたパズルのピースが一瞬にしてつながり、ひとつの絵図を描き出す。

「……お前が“<sup>ヌブ</sup>新人”だったんだな」

肯定のかわりに、シエルは笑った。

今度は、俺の知っている笑い方　　唇の両端だけを、まなじりまでつりあげた笑み。俺の良く知る、あの笑みだ。

いつも、思うことがある。

どうして俺のまわりにはいるのは、こんな奴ばかりなのだろう？

『ちょうど、六人ね』

部屋に踏み込まれた時、女はそう言ってくすくす笑った。

武装して踏み込んできた俺達六人を、己の棺の担ぎ手になぞらえての言葉　　旧埋葬機関の長もまた、ずれたユーモアの持ち主だった。

女の名前は知らない。ナルバレックという姓と、埋葬機関の長という肩書き　　そして、サディスティックな殺人狂として、皆に知られていた。そして、それで充分だった。

何故なら、この女　　ナルバレックは本日をもって、埋葬機関の長の座を引きずりおろされるからだ。去っていく者に関して、よけいなことは知る必要がない。

『ごめんなさい、お茶でも出そうと思ったんですけど……もう誰も、私の言うことを聞いてくれないのよ。……今のヴァチカンには、私のためにお茶ひとつ淹れてくれる人もいないでしょうね』

状況を分かっているのかいないのか、ナルバレックは本当に申し訳なさそうに言って、優しげな笑みを浮かべる。

顔の半分を長い髪で隠していたが、それでも完璧に近い美貌と、聖母を思わせる慈しみに満ちた笑みはいささかも損なわれていない　この女が本当に、暗殺集団の元締めなのか、俺にも信じられなくなった。

その部屋　旧埋葬機関の“執務室”（実際、どう呼ばれていたのかは知らないが）にしてもそうだ。

宮殿の一室のように広いが、瀟洒で清潔感がある。壁には風景画がいくつかけられ、黒檀のデスクには待雪草ネグロツツがいけられた花瓶　人殺しの部屋にふさわしい、異常性のかけらもない。

俺が部屋の内装に気を取られていると、ナルバレックが優雅な動きで、肘かけ椅子から立ち上がった。

同時に、俺の横にいたオキーフ　S B S（英国特殊舟艇隊）くずれのアイルランド人が、ヘッケラー&コッホMP5Kの銃口を、女に突きつける。

『勝手に動くんじゃねえ』

抑えた声音で威圧するオキーフを、ジョゼッペが顎をしゃくって制した。アイルランド人が短機関銃をおろす。

それを見届けると、ジョゼッペはナルバレックに歩み寄り、顔をよせた。

『負けを認めなさい。法王も枢機卿も私についた。あなたが言った通り、今や誰一人、あなたのために指一本動かさんだろう。素直にここを去るなら、手荒なことはしない』

断固とした　だが、信じられないほど、優しい口調。自ら追い落とそうとしている女を、本気でいたわろうとするように。

ジョゼッペの言葉は事実だった。最後の一部分をのぞいて。

長らく埋葬機関の長の座を独占していたナルバレック一族。その裔すえである、目の前の女を追放し、自分達が成り代わろうとするために、俺達はここに来た　ようするに、クーデターだ。

クーデターを計画したのは、当時は埋葬機関ではなく、法王庁の情報部であるプロ・デオとかなんとかいう組織に属していたジョゼッペだ。ひそかに手勢を集め、法王と枢機卿の密約を取りつけ　機が熟すや、一気に行動を起こした。

いざ実行にうつすと、旧埋葬機関、及びナルバレックの味方をしようとする者は、誰もいなかった。

ただでさえ、旧埋葬機関は独断専行が目立つ組織で、法王の意図に逆らうこともしばしばだったのだ。そのうえ当代のナルバレックは、殺人嗜好の鼻つまみものときている。

敵に回る者こそ多けれ、擁護にまわろうとする奴など、ヨーロッパ中探したって見当たらなかっただろう。

そんなこともあって、自分が新生埋葬機関の長になったあかつきには、法王庁の意向に最大限従う、との条件でジョゼッペが協力を要請した際、枢機卿どもは待ってましたとばかりに計画の支援を約束した　まさかこの時の約束のために、その後東欧でさんざん

どさまわりをさせられることになるうとは、俺も思わなかったが。

ともあれ、計画は大成功だった。

その日だけで、埋葬機関の殺し屋どもの七人のうち、五人を殺していた。残りの一人は死よりも服従を選び、そして最後の一人は、計画の当初からこちらに寝返っていた。それが“新人”の暗号名を持つ二重スパイだった。そのもぐら野郎の手引きのおかげで、俺達は手際よく、埋葬機関の殺し屋どもを始末できたわけだ。

もっとも、事情に疎かった俺は、“新人”が誰かどころか、旧埋葬機関がたった八人で構成されていたことすら知らなかったのだが。

ジョゼッペの言葉にうなずき、女はデスクの下に置いていた旅行用トランク（用意のいいことだ）を手に取り、今度こそきちんと立ち上がる。

『分かっています。今さら、どうにもならないことは。……それに、ここで抵抗して殺されたところで、私のために泣いてくれる人は、誰もいないでしょうし』

やけにさっぱりとした調子でそう言い、空いた左手を、ジョゼッペにさしだした。握手を求めて。

『さようなら、ジョゼッペ。あなたとあなたの騎士達に、幸多からんことを』

俺を含め、みんなが驚いて顔を見合わせた。

奴を“ジョゼッペ”と呼ぶのは、俺以外に誰一人いなかったのだ。みんな、“猯下”とか“モンシニョール”とか“キャリアーニ司祭殿”と呼んでいた。ジョゼッペという通り名を知ってはいても、何かの禁忌のように、決してそれを口には出さなかった。

にもかかわらず、ナルバレックは奴を“ジョゼッペ”と呼んだ。まるで、いつもそうしていたみたいに。

そして、さらに驚くべき光景が俺達の眼前で広がった。

さしだされた手をとったジョゼッペが、女の手の手甲にキスしたのだ。騎士が、淑女に対するようにおごそかに。

今にして思えば、前任者に対する、ジョゼッペなりの敬意の表し方だったのだろうが、その時はただ、あぜんとさせられた。

ナルバレックはにっこり笑うと、トランクを手に、ドアまですたすた歩いていく。

一番うしろにひかえていたルーマニア人のイリナが、<sup>ドラグノフ</sup>SVD狙撃銃を反射的に向けたが、ジョゼッペはそれも制する。

ドアノブに手をかけたところで、ナルバレックが振り返った。

『そうそう。あなたが“執行者”ね？』

言葉は俺に向けられたものだった。仕方なく、うなずく。

『すてき。私にも、あなたのような人がいればよかったんだけど』

俺は無言だった。

『こんなことをご存知かしら。……天才と呼ばれる者には、二種類いるの』

首を振った。とうとつすぎる質問。意図が、まったく分からない。

『神に選ばれた者たちと、神に抗<sup>あらが</sup>うために生まれてくる者たち　その二種類の人間が、天才と呼ばれるのよ』

それ以上の説明はなかった。ナルバレックはくすくす笑い続けるだけだ。

やりとりを断ち切るように、ジョゼッペが俺の前に出た。

『行くあてはあるのか。……よければ、誰かに送らせる』

ジョゼッペらしからぬ申し出　今度は誰も驚かなかった。単なる親切心で言っているのではないことを、みんな分かっていたからだ。

『せっかくだですけど、遠慮しておきます。今日はいいお天気だし、歩いていくと気持ちいいでしょうから』

申し出を断り、また俺の方に向かって言う。

『エーゲ海にある、小さな島を買ったの。これからは、そこでお花を育てて暮らすつもりよ。……よかったら、一度遊びにいらしてね』

俺は肩をすくめた。島どころか、ナルバレックは空港まですらたどりつけないだろう。本人も、そのことは分かっているのだろうが。

ナルバレックは静かに部屋を出て行った。

待ちかねたようにオキーフが無線機を取り出し、待機している襲撃部隊に、ナルバレックが出て行った旨を連絡する。

そのとなりで、細巻に火をつけているジョゼッペに、俺は訊いた。

『なあ、ジョゼッペ』

『……何だ？』

『あんた、あの女に惚れてたんじゃないのか？』

俺の質問に、奴はしばらく反応を見せなかった。ただ、ぼんやり天井を見上げながら、ゆったりと紫煙をくゆらせていた。

そして、思い出したように、ぼつりと応じた。

『お前は、たまに妙なことを言う』

俺はまた、肩をすくめた。煙草をくわえ、火をつける。

ナルバレックが“事故死”した報告が入ったのは、それから数時間後のことだった。

「どうりで、ぶち殺した連中の頭数に、お前が入ってなかったわけだ。俺はてっきり、お前が埋葬機関をとっくに辞めてたからだと思ってたんだが」

何の意味もない、納得の言葉を吐き終わったところで、俺はつまった。

それで、俺はどういう態度をとればいい？

裏切り者のシエルを責めるのは馬鹿げている。俺達の勝利は、彼女の裏切りがもたらしたものだ　もっとも、勝ち取った地位はろくでもない代物だったが。

かといって、礼を言うのもおかしい気がする。シエルはシエルのゲームをしただけだ。俺

の、俺達のために、何かやったわけじゃない。

シエルは笑う。俺が惑うのを楽しむように。

「お話は、日本にいた時にいただいたんです。その後ずっと、狛下のもとで働いてたんですよ。もっとも、埋葬機関が入れ替わったあとは、狛下の配慮でヨーロッパを離れてましたけど」

やめろ。

奴の名前なんか聞きたくない。お前の裏切りは聞きたくない。お前が俺の前から去ってすぐ、あの糞野郎の下で汚れ仕事をしてたことなんか、もう聞きたくない。

しかし、俺自身の口から出た言葉が、その話題を保たせた。

「つまり、あのことがあってからずっと、お前は埋葬機関……ナルバレックを裏切ってきたんだな」

「もともと、私的な復讐のために属していたわけですから、組織に対する忠誠心はなかったんですよ。……お世辞にも、人望がある長ではありませんでしたし」

お前よりはました。

「それでジョゼッペについたってわけか。あの野郎はナルバレックより性質が悪いと思うが。……何故、そうした？」

「埋葬機関に新たな風を吹き込むため……と言ったら、信じますか、志貴？」

お笑い草だ。

「よせよ。……お前はただ、好きだっただけだ。裏切ったり、だましたり、陰でこそこそやること全てがな」

畜生、こんなことは言いたくないのに。

「そうかもしれませんがね。狛下のもとで活動している時は、私、とても充実していましたから」

そんなお前は赦せない。

「楽しんだら。愉快的なスパイごっこを、死ぬほどやらせてもらって。昔仲間だった連中を、殺す手引きまでして」

「面倒な部分は、あなたがやってくれましたしね。……いかがでした？ 死徒ばかりではなく、人間を殺すのも楽しみました？」

悪びれた様子もなく、俺に調子を合わせ、やりかえすシエル。

もうやめてくれ。

「面白くもなるともねえ。埋葬機関の連中は化物狩りが専門で、狙われることには慣れてなかったみたいだしな」

そう、拍子抜けするほど、連中はもろかった。もっとも、埋葬機関の殺し屋どもが、人間と呼べる域にあるかどうかは別問題だが。

「さすがは“執行者”。……この数年間、世界中の教会を渡り歩いてましたけど、どこにいてもあなたの噂は耳に届きましたよ」

それでお前は何とも思わなかったのか。

「いいご身分だな。俺がくそ化物どもを殺している間、お前はあちこちの教会に居候して、うまいものをたらふく食ったあげく、前の倍ぐらい、けつがでかくなったわけだ」

シエルから顔をそむけ、まだかすかに震える指で新たな煙草を取り出しながら、俺はどうしようもないもどかしさと、いらだちに襲われていた。

俺はこんな話がしたいんじゃない。シエルと会ったら、したい話があった。たくさんあった。十年ぶんの話を、今こうして現れたシエルとしたかったのに  
でも話せない。

「倍、はひどいですね。確かに、ずいぶん成長したのは認めますけど」

すっかりおなじみのわざとらしさで、シエルは腕を組み、臀部同様、馬鹿でかくなった胸を押し上げた。顔には淫売じみた媚び。

ぶち殺すぞ。

今日は本当に殺意をいただくことが多い日だ　　化物狩りをしている時の方が、ずっと心穏やかだ。

シエルから目をそらし、静かに自分に語りかける。

落ち着け。あれはシエル得意の擬態だ。娼婦の仮面をかぶって、俺をからかっているんだ。本当のシエルなら、あんな真似はしない

本当のシエルとはどんなだ。

舌打ちした。

勝手に自問したあげく、どつぼにはまっている　　俺は本当の間抜け野郎だ。

「そんなことはどうでもいい。今のお前は、みじめな脂肪の塊だ。……もう満足に、黒鍵も投げられないんじゃないのか？」

吐き棄てた。また、タンブラーをジンで満たす。

「そこまでは衰えてませんよ。……もっとも、高名なる“執行者”に比べれば、現在の私は、ただの女の子同然ですけど、ね」

「女の子って歳でもねえだろ」

「傷つきますね。今の肉体年齢は、あなたと同じぐらいなのに」

そこでシエルは言葉を切り、小首をかしげた　　懐かしいあの笑みを顔に浮かべて。優しく暖かい、あの笑みを浮かべて。

思わず、腰を浮かしかけた。

俺のシエルだ。

言葉が出ない　　容貌の激変にも関わらず、今目の前にいるのは、十年前のシエルだった。あの校庭で出会った、俺の大好きなシエルだった。

シエルは微笑みひとつで、十年の歳月と、俺のねじくれきった精神と、うんざりするような鬱屈の日々を吹き飛ばしたのだ。

「本当は、志貴に会いたかったんですけど……してきた任務の性格上、ほとぼりが冷める

までは、ね」

同意を求めてか、あだっぼく片目をつぶるシエル。

笑みひとつでだまされるな、馬鹿。

夢想は一瞬で覚めた。

シエルは俺を“志貴”と呼んでしまった。

シエルは娼婦の仮面を脱ぎ忘れてしまった。

意図的にやったのかもしれないが 過去のイメージを台無しにするようなふるまいが、俺に理性（まだあったことに乾杯！）を取り戻させた。

「お愛想はやめな。……お前は、俺のことなんかどうでもよかった。お前にとって俺は、任務に利用する価値のある、間抜け野郎でしかなかったんだろが」

先程と同じ調子で切り捨てた。

甘い幻想は、はかなく去った。やっぱり、今ここにいるのは、昔のシエルじゃない。

シエルが無表情になった。椅子から立ち上がり、こちらに歩みよる ゆっくりと。

座ったままの俺の前で、立ち止まった。

「本当にそう思いますか？」

表情のない、シエルの顔はいつになく真剣味を帯びている 仮面をかぶっていない時は、こんな感じなのだろうか。

俺は何も言わなかった。思い浮かんだのは、そんなひねたことだけだ。

スローモーションにも似た緩慢さで、シエルは両腕をのばしてきた。急な動きを見せれば、俺が反射的に攻撃してしまうのを考えてのことだろう。

「私だって、志貴に会いたかったんですよ。本当に会いたかった。でも……」

のばされた両手が、いつくしむように俺の頬をなでた。

うるんだ瞳が、切なげに俺の眼前でゆれている。キスしようと思えば、簡単にできる距離。抱擁しようと思えば、拒むこともできない無防備さ。

「十年もかかってしまったけど、今やっとこうして会えたんです。だから……」

そこで止めさせた。

ふれなば落ちん、といった風情で俺にしなだれかかろうとするシエルの喉元に、ナイフを押しつける。シエルの顔が凍りついた。

「ジョゼッペから聞いた。お前は、二度と俺に会いたくない、と言ったそうだな」

俺の声は、白刃の放つ光より冷えていた。

「それは、猊下が……」

ナイフから逃れようと上体をそらしながら、苦しい言い訳をするシエル。

「ああそうだろうさ。二重スパイとして取り込んだお前を守るためには、過去を知る俺と接触させるのは避けなきゃならん。それで、ジョゼッペの野郎がそんな嘘をついた……そう言いたいんだろ？」

かすかに、シエルはうなずいた。

俺は笑みを浮かべる　　いつものあの笑みを。シエルの、ジョゼッペの笑み。闇の中で這いずり回る、神から見放された亡者たちの笑み。

「そんなことはどうでもいいんだ。実際のところ、お前が俺に会いたかったのか、会いたくなかったのかなんてことはな。肝心なのは、お前が奴のゲームに乗ったことだ。こちら側に戻っちまったってことなんだ。……言ってる意味が分かるな？」

再び首肯　　シエルの顔に、じわじわと笑みが広がっていき、ほどなく俺と同じ悪相へと変じる。娼婦から魔女の仮面に取りかえたシエルは、俺から身を離す。

「あなたは強くなった。賢くなった。それなのにまだ、しがみついているんですね」

憐憫と嘲笑のいりまじったシエルの声が、俺の心臓をわしづかみにした。

「仕方ないといえば仕方ないんですが。……あれだけ美しい夢を見たら、死ぬまで忘れられるものではないでしょうから」

分かっていたのなら。

声が出ない　　俺は反論する言葉を思い浮かべることすらできず、痴呆のように口をばくばくさせている。

「でも、これだけは言わせてもらいますよ　　私はもう、あなたのシエルを演じたりしません。……それは、任務ではありませんから」

閉幕。

それは　　俺にとって、文字通りの最後通牒だった。

全身から血の気が引いた。足元に口をあけている、暗く深い陥穽のイメージ。

「失せろ」

弱々しく、震える声。自分のものだと気づくのに、しばらくかかった。

「そうしますか……では」

シエルは背を向けた。

行かないでくれ。

「しばらくはヴァチカンにとどまります。……また、会うことになるでしょう」

俺のシエルでいてくれ。

「じゃあ、おやすみなさい、志貴」

お前の大嫌いなあいつの話をしてくれ。

無情に、ドアの閉まる音が響く。シエルの気配が、完全に消えた。

こうこうと灯りで照らされた部屋で、俺はまた独りになる。

しばらくの間、じっとしていた。思考は完全に停止し、胸の中には空白だけがある。その瞬間の俺は、生ける屍に等しかった。

無意識に、この空虚を埋める行動を、手が求めた。

リモコンをつかみ、いつもはろくに見ないテレビのスイッチを入れる。突如静謐を引き裂いて現れた人工的な音と光は、俺の中の虚無をただ、素通りしていった。

ほどなく、見たことのない映画が始まった。一時間ほど、それに鼓膜と網膜のみを刺激さ

せていた。

やがて、だんだん思考力が戻ってくるにつれ、映画の筋がつかめてきた。

冬山で遭難した軍人が、飢えに負けて人肉を喰い その結果、人智を超える“力”を手に入れる。そういう話だった。

軍人は得た力を存分にふるい、人間を狩り、喰い殺す。人喰いに堕したその男は、無敵の存在だった。

しかし、どれほど己の強さを誇り、飽くほどに人肉を喰らおうとも、人喰い野郎は満たされなかった。

人喰いは、孤独だと泣いていた。

人喰いは、自らが喪ったものの大きさに嗚咽していた。

人喰いは、ひたすら嘆き続けながら、自分と全世界を呪っているように見えた。

「うるせえ！」

空になった酒瓶を、テレビに向かって投げつけた。閃光 そして白煙。ブラウン管を破壊されたテレビが、映像をたれ流すのをやめた。

また、室内に静寂のとばりがありた。テレビは白煙をあげながら、ぱちぱち音を立ててくすぶっている。

俺はうなだれ、頭をかかえた。

十年もの間、この日を夢見てきたはずだった。どこかで生きているかもしれないシエルと出会い、俺の人生の中で、唯一輝いていた日々、唯一見た美しい夢、そして唯一求めた女の話をする 脳内の記憶とではなく、生身のシエルと。

だが、それはかなわない。俺と話し、ともに笑ってくれる“シエル”の仮面を、お前はもう棄ててしまっていたんだな。そして、俺もあの頃のような、善良な間抜け野郎 “遠野くん”じゃなくなっていたわけだ。

俺が見たこの夢も、やっぱり最初からありえないことだった。

立ち上がった。まだ手にしていたナイフを部屋のすみに投げ捨て、電灯のスイッチを消した。闇の中を手探りで進み、服も脱がずにベッドにもぐりこむ。

シエル

俺はただ、お前と話をしたかった。

お前と、あの頃の話をしたかった。

お前に、また微笑んでほしかった。

ただ、それだけなんだ

【前編・了】